

吳音共にノウの草體、訛は「濃」(吳音ノウ)の草體、通は「通」(乃)と同字、又俗に「通」とも書くの草體、愛は「野」訓ノの草體より出て、片假名ノは「乃」の略體、又、萬葉假名としては、前記「乃」に「通」能、濃、野の外、訓を取れるものに「範」あり。

の野【名】廣く平にして、草又は低き木などの生えたる土地。はら。のはら。のぬ。

野くれ、山くれ【句】野にてもあれ、山にてもあれ。野の末、山の端(ニ)にても。のれ(野七里)参照。夫木「東路や旅の空こそあはれなれ野くれ山くれ駒にまかせて」

野となれ、山となれ【句】いかやうにとなると構はず。「諺語」(俗語)後)は野となれ山となれ、前に牡丹の花が咲く「善門松」大事の家業も、餘所になり、内は、野となれ、山となれ、夜を目に次いで、の里がよひ」

野に叫ぶ人【句】「基」「ババテズマのヨハネ」を見よ。

野に青草【句】無し【句】左傳の僖公二十三年の條に「室如縣罄、野無青草」とあるに本づく「食物乏しく、野の草までも喰ひつくしたり。」「諺語」

野の行幸【句】「句」鷹狩を御覽のために、野外に行幸したまふこと。平安朝時代、大原野、北野、嵯峨野などの地を擇ばれて、多くは冬季に行はれ、鷹飼供奉し、親王、公卿以下、狩衣にて扈從す。野には、御座所をしつらひ、饗饌を供へて、興を添へられたり。源氏「野の行幸につかうまつりたまへるためし」十訓白河院御位の時、野の行幸といふ事あり

野の盛【句】「句」野の草花のさかり。秋草の花さかり。空蟬「野のさかりは、八月の十日」

野も狭【句】「句」野も狭きまでに。のせ野面参照。「古語」風簾「秋なれば萩の野もせにおく露のひるまにさへ

も懸しきやなど」野を焼く【句】野焼(ノ)をなす。太藪「野を焼くや荒くれ武士の烟草の火」の筈【名】矢の軸。實用のものは、竹にて作り、白筈(ノ)焦筈(ノ)淋筈(ノ)拭筈(ノ)などの種類あり。長さ十二束を普通とし、それより短き矢を小矢(ノ)、それより長きを大矢(ノ)といひ、十五束より十八束に及ぶものあり。やがら。やだけ。やの。和名筈、乃、箭竹名也。太平記若し鑑の上を射ば、筈掛け、鐵折れて、通らぬ事もこそあれ」

の荷【名】「荷」に同じ。(但し、熟語にいふ、「古語」「荷前(ノ)」)「荷持田村。荷持、此云能登利」

の幅【名】横又は縦に縫ひ合はせて、幕に作れる布帛。外幕(ノ)にては、最も上部なるを、一の幅又は冠(ノ)の幅、乳附(ノ)の幅といひ、第二のを、二の幅又は間(ノ)の幅、第三のを、三の幅又は軍勝(ノ)の幅、第四のを、四の幅又は勝(ノ)の幅、第五、即ち最も下部にあるを、打(ノ)の幅又は香(ノ)の幅、芝打(ノ)の幅、芝摺(ノ)の幅といふ。

の【助】「名詞・代名詞又は名詞句・名詞節の下に添ひて、所有格を示す語。」「汝の物」「探幽の畫」「夏の夜」「二と三との和」「あひ見ての後」「君や來(ノ)ん我や行かん」のいさよひ」

「名詞又は代名詞の下に添ひて、同格を示す語。」「武藏の國」「誰しの人」

「名詞の下に添ひて、より成るに造りたるの意を示す語。」「銅の鍋」「竹の簾」

「地名を示す語。」「在る、又は於ての」といふ意に添ひて、在る、又は玉川「湊川の戦」

「姓と名との間に挿みて用ふる語。」「鎌倉時代以前の用法」

「在原の業平(ノ)」「藤原の道長(ノ)」「平の清盛」

「源の頼朝(ノ)」「曾我の五郎時致(ノ)」

「名詞の下に添ひて、助動詞の連體形となると同じく、にであるの意を示す語。」「伯父の何某といふ人」

「名詞の下に添ひて、の如きの如くの意を示す語。」「露の命」「朝日の笑みさかえて」

「或種類の名詞又は副詞・貌詞に添ひて、その状態

なる意を示す語。」「紫の紙」「三角の板」「燈との使」「ひたぶるの業」「面白の景色

や」

「附屬節にて、名詞又は代名詞の下に添ひて、主格を示す語。」「花の散る夕ぐれ」「風の寒き日」

「名詞に屬する形容の語句を、その名詞の下方に記す時、その名詞と形容の語句との間に用ふる語。」「船の帆を張りたるに乗りて」

「主に、口語文にて、連體形の語句の下に、名詞を省きて、その代りに用ふる語。」「上等なものを呉れ」「善いもの、悪いものも有る」「何の、か」と云ふ」「死ぬの、生きるもの、大膽をする」「狂言武藝」

「かやうにして置か、しやるのは」

「桂園」桂夏の夜の月の影なる桐の葉を落したるのかと思ひけるかな」

「俳諧新選移竹」

「御代の直(ノ)など九いの」

「二五の十」

「に」にての意を示す語。」「(二十五の十)」

「笑止の候」

「なれども、ながの意を示す語。」「とは云ふもの、お前ではなし」

「平定能登殿は、度度の軍に一度も不覺したまはぬ人の、今度は、……西を指してぞ落ちたまふ」

「を」に同じ。」「もとの撥音にて終れる名詞の下に添ひて、その撥音の影響を受けたるものなれども、後に、末尾の撥音ならぬ名詞の下にも用ひらるるに至れる」

「院宣の賜はる」「三十四年の經て」

「の轉訛。」「定めて面白かつたであらうの」

「いとから行くはいの」

「これが惜い奴の、若し嫌なら」

「太郎冠者、太刀をおくせい」

「和合人「怪談ばなしは、手もなく、百物語をするやうなものだの」

「大學の「初學入徳之門」を「初學、徳に入るの門」と訓む類の、漢籍の訓讀より出づ」

「動詞・形容詞又は助動詞の連體形と名詞又は代名詞との間に挿みて用ふる語。」「男子志を立つるの時」

「甲陽軍鑑」一人に五百貫つづ……御知行遣さるべきの旨、何より以ての御事なり」

「ので」「句」なるに因りて。」「昨日は休んだので、知りません」

「のに」「句」に同じ。」「行かうと思つてゐるのに」

の野【接頭】「木材石材などの、十分に加工してあらぬ意。」「野天井」「野縁の」

「野板」「野面(ノ)」

「の轉訛、諺草の「野風俗」の條の註に「いやしきことを野といふ」とあり」

「野太(ノ)」

「の幅」

「布帛の幅(ノ)を數ふる語。」「一幅は普通八九寸乃至一尺。」「三幅(ノ)風呂敷」「四幅(ノ)蒲團」

の【諸語】「(No)」

「名」

「舊約全書中の傳説的人物の一。九百五十歳にして死せりといふ。」「

諸語の洪水」

「句」舊約全書の創世記に神が罪惡の増加に對する懲罰のためにせりと記せる洪水。但し、人類の絶滅を防ぐために、ノア、時に六百歳。その子孫、漸次に繁殖して、歐羅巴人及びセム人、ハム人となれりといふ。」「

の【あきみ】野藷【名】「植」菊科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達し、葉は長橢圓形にて、粗なる羽狀に深裂し、葉縁に剛刺多し。花は筒狀花のみにて、頭狀花序をなして開き、初夏、淡紫色を呈す。各地の原野に自生す。あさみ、ひめあさみ、べにふて。まゆはき。」「

加工してあらぬ意。」「野天井」「野縁の」

「野板」「野面(ノ)」

「の轉訛、諺草の「野風俗」の條の註に「いやしきことを野といふ」とあり」

「野太(ノ)」

「の幅」

「布帛の幅(ノ)を數ふる語。」「一幅は普通八九寸乃至一尺。」「三幅(ノ)風呂敷」「四幅(ノ)蒲團」

の【諸語】「(No)」

「名」

「舊約全書中の傳説的人物の一。九百五十歳にして死せりといふ。」「

諸語の洪水」

「句」舊約全書の創世記に神が罪惡の増加に對する懲罰のためにせりと記せる洪水。但し、人類の絶滅を防ぐために、ノア、時に六百歳。その子孫、漸次に繁殖して、歐羅巴人及びセム人、ハム人となれりといふ。」「

の【あきみ】野藷【名】「植」菊科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達し、葉は長橢圓形にて、粗なる羽狀に深裂し、葉縁に剛刺多し。花は筒狀花のみにて、頭狀花序をなして開き、初夏、淡紫色を呈す。各地の原野に自生す。あさみ、ひめあさみ、べにふて。まゆはき。」「

の【あそび】野遊【名】「野」に出て遊ぶこと。のがけ。遊山。俳家奇談談叢「野遊の狩も穂にする茅花(ノ)かな」

「野遊にて、狩獵をする」と。

「古語」

「野遊に、狩獵する」と。

「古語」

をゑるわ るれるりら よゆや もめんむかま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

のあらじ 野荒〔名〕田畑をあらすこと、又その人職など。

のいんき 野軍〔名〕やせん〔野戦〕に同じ。

のいじなら 野石櫓〔名〕植〔おほなら〕大櫓に同じ。

のいずみ 肉刺〔名〕脊癰〔せび〕又鼻緒癰のために、足に生じたる瘡。まめ。〔古語〕和名肉刺、乃以須美、脚指間生、肉如刺、由著三靴小、相措而所生也。

のいそ 〔名〕鳥の羽の軸の兩側の内に、幅狭き方。するもぎ。かいた。〔矢工の話〕

のいた野板〔名〕建〔野〕は接頭語、掘き割りたるまに、鉋削を施さぬ板。あらいた。のつら〔野面〕参照。

のいちび 野商麻〔名〕植〔からすのま〕〔烏胡麻〕に同じ。

のいぬ 野犬〔名〕やけん〔野犬〕に同じ。

のいばら 野薔薇〔名〕植〔薔薇科〕に属する落葉灌木。幹は細くして、やや状を呈し、高さ三四尺、枝に刺多く、葉は奇數羽状複葉をなして、互生し、各小葉は、楕圓形にして、鋸齒を有す。初夏、白色又は帯紅色なる五瓣の花、枝梢に穂をなして開き、紅色大豆大の果實を結ぶ。花は香氣あり、蒸溜して、香油を採ひ得べし。のばら。ばら。



(らばいの)

のいふす 偃す〔動四自〕萎〔え〕臥す。のえふす。ぬえふす。〔古語〕字彙集「偃、ノイフス」

のう能〔名〕能く事を爲し得る力。はたらき。才力。堪能。能力。才能。藝能。技藝。盛衰記「能者を請ひて、能を顯すには」。

のうえ 能依〔名〕佛。他の事物をたよりとする事物。例へば、土地と草木との關係に於ける草木などの類。〔所依〕に對して。盛衰記「能依の戒光を、胸中に輝かしながら、所依の戒境を、砌下〔かき〕に許されす」。

のうえん 能縁〔名〕佛。六根の、六境に攀緣して生ずること。〔所縁に對して〕麗なること。あくどく、美しきこと。

のうえん 濃鹽濃艶〔名〕濃厚にして艶麗なること。あくどく、美しきこと。

のうか 農家〔名〕農民の家。ひやくしやうや。田家。

のうか 農歌〔名〕農作に従事しながらうたふ歌。即ち田植歌などの類。

のうか 濃香〔名〕濃厚なるかをり。こまやかなるにほひ。

のうか 農耕〔名〕田島をたがやすこと。耕作。

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、その効能を記して添へたる紙。かうのうがき。

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうがき 能書〔名〕賣藥などに、信用すべからざる効能を、數多く書き立つること。〔語義〕

のうけと

9

3

をゑゐわ ろれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

農夫。百姓(シヤク)。農人。



短きは数日間、長きは三月にして、五六週
間後に全治し、又、角膜潰瘍を發して、失
明するもあり。俗に風眼(フウガン)といふ。膿
漏眼。膿漏。化膿性結膜炎。
のうゑ能恵(ノウエノエ)「人」僧。藤原道長の次
男頼宗の裔、中御門宗能の第十五子。東
大寺に學ぶ。嘗て大般若二百卷の圖を畫
寫供養せんことを發願し、半ばにして病
死せしが、この發願のために、再び人界に
生を得て宿願を遂げ、仁安四年(一説に
は承安四年)遷化せりと傳へらる。
のうゑとくごふゑ能恵得業繪(ノウエトクゴフエノエ)「美」
次條に同じ。

のうゑほつゝゑとくごふ能恵法師繪詞
「美」僧能恵の再生の傳説を畫きた
るもの。山城國太秦(タマツ)の廣隆寺所藏の
一巻、最も有名にして、明治三十年國寶に
指定せらる。筆者は藤原行長、詞書は寂蓮
と傳へ、筆者の行長なることは、眞なるべ
しといふ。一名、能恵得業繪。「農」農
のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す
のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す
のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す

のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す
のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す
のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す

のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す
のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す
のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す

のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す
のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す
のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す

のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す
のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す
のうゑん農園(ノウエン)「名」園藝作物を栽培す

のおかん「名」前條の訛。
のおくり野送(ノウセウ)「名」のべくり(野邊送)に
同じ。女殺油地獄「誰を野送、あゝ氣味わ
る」日蓮上人御法要「自害なされし野送の御
回向」
のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。

のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。

のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。

のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。

のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。

のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。

のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。

のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。
のおと(英字)「名」しるし。記號。

のかぜ野風(ノカゼ)「名」野に吹く風。古今「吹
きまよふ野風を寒み秋萩のうつりもゆく
か人の心の」
のかた野方(ノカタ)「名」野仕事(ノシゴト)に關係あ
ること。用明天皇入關「牛飼か、草刈か、い
かさま、野かたの御奉公と承りぬ」
のがた筧形(ノガタ)「名」矢の筧の形。
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
次條に同じ。

のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」

のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」

のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」

のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」

のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」

のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」

のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」
のがたさふちゆう筧形吸蟲(ノガタ)「動」

のがみ野雁(ノガミ)「動」涉禽類に屬す
る鳥。翼の長さ二尺に達す。頸長く、嘴
と脚とは黒く、趾は前方に三本あり、距
なく、頭と頸とは灰色、背部は黄褐色に黒
色の横條あり。胸部は栗色、腹部は灰白
色。雁の類とは關係なき鳥にて、東部シ
ベリヤ・支那朝鮮等に産し、我國本土に
も、昔は棲みたり。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。

のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。

のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。

のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。

のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。

のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。

のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。

のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。

のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。
のがみ(鹿子草)に同じ。「皮」に同じ。

のきば 退羽〔名〕次條を見よ。

退羽打つ〔句〕鷹その飼主にそむき
て飛び去る。一説には、鷹鳥を捕り得
ずして、羽打つ。〔古語〕金鷹のき
ば打つ眞白の鷹の多ぶくろにをき餌も
ささて歸しつゝるかな

のきばた 軒端〔名〕のきば(軒端)に同じ。
和泉式部集「軒ばたに見えず集がけるわが
宿は蜘蛛のいたくぞ荒れはてにける」
のきばのうめ 軒端梅〔名〕さうぼく(東
北の古稱。

のきび 野稷〔名〕「植」禾本科に屬する
一年生の草。莖は多少地に横臥し、葉は
細長く、花は稷に類す。九州以南の地に
自生す。

のぎへん 禾偏〔名〕「運歩色葉集に「禾
」の字を「ノギ」とも「ノギヘン」とも訓め
り。禾は、秦漢以前には、稷を指し、後世、
稻の意に用ふるに至れる字なるを、片假
名「ノ」と漢字「禾」とを合はせし形なるよ
り、我國にては「ノギ」と訓するに至りし
なるべし「漢字の偏の」。「稻」「秋」「稻」
「種」などの左方に在る禾の字。

のぎまねすけ 乃木希典〔名〕「人」軍人。
長府の毛利侯の臣。希次の第三子。江戸
の藩邸に生れ、藩校に學び、伏見の兵學校
にて、佛式の兵學を傳習す。明治四年陸
軍少佐に任じ、神風連の騷動、秋月藩の壯
士の暴舉、西南戰等に従
軍す。十九年獨逸留學
を命ぜられ、
二十一年に
歸朝す。日
清戰爭に出
征し、中將に
昇任、軍功に依りて、男
爵を授けらる。後、臺灣總
督第十一師團長を經、日露戰役起るや、
第三軍司令官に任ぜられて、旅順攻陥の
任務を全うす。戰後、軍事參議官、學習院長
となり、伯爵を陞授せられ、四十五年、明
治天皇の崩御あらせらるるや、御大葬日
夫人靜子と共に自刃す。年六十四。



(のぎまねすけ)

のきみち 退道・退路〔名〕退き去る路。
のがれ行く方面。退路(のき)。若風鳥のき
道をあける

のきめ 芒目〔名〕陶器、磁物などの肌
にある、芒(のき)の如き文理(のき)。〔に同じ〕
のきやうかう 野行幸〔名〕「野の行幸」
のきやうらん 芒蘭〔名〕「植」百合(のき)科に屬
する多年生の草。各地の山野に自生し、
葉は根莖の頂端より、十數づつ叢生し、各
葉は披針形にして、全縁。花莖は葉間よ
り抽出し、高さ一尺餘に達し、夏季、その
上部に、帶黃褐色の花、穗狀花序をなして
開く。きつねのを。

のきわり 軒割〔名〕瓦簷を、戸數に應じ
て割りあつること。軒別の賦課。
のき退く 除く〔動四自〕「のこる(残る)」
を見よ。退け離る。避く。立去る。し
りぞく。どく。たちのく。離係を離
れ去る。まぬかる。脱す。源氏「いとよき
あはひなりと、思ひも譲りきこえつべく、
の心地したまへ」二「間隔たふ。疎遠
になる。狂言笑かづき」五「世をかねた妻と
ても、のけば他人ぢや」五「人女、わが子、
いまだ定まる妻とともなし、そなたもの
かぬ中なれば」四終る。しまふ。果つ。
會我會精山「ひしげてのけと押しければ」
丹波興作、拳を固めて、目鼻の間缺けてのけ
と打たりけり」

のき退く 除く〔動二他〕「のくやう
に。よけさす。しりぞかす。立ち去ら
ず。取放して、外へ送り又は別にし
ておく。のぞく。とりのぞく。とりのく。
除外す。終るやうにす。しまはす。果
す。遂ぐ。會根崎心中「いっそ死んでのけた
いと、泣くより外の事ぞなき」丹波興作「土
山の田村堂で、つり平けてのけらるる」
俗曲歌謡「蟬と螢を秤に掛けて、泣いて
別れよか、焦れてのけよか」

のきさ 野草〔名〕野に生えてある草。原
野の雜草。野草(のき)。清原公集「ほのむす
ぶ野草がくれの花すきとけてや秋の過
ぎんとすらん」

のきさ 野草〔名〕「植」莎草(のき)科に屬する
多年生の草。一根より、多數の細長き葉
叢生し、莖は葉間より抽出して、高さ一尺
餘に達し、二三の小葉互生す。初夏、莖頂
と上部の葉腋とに生ずる小穂に、綠褐色
の疎なる小花穂を著く。原野に自生す。
のきさ 野草〔名〕野外にて脱糞するこ
と、又その糞。

のきさ 野草〔名〕「佛Nothura」〔名〕「音」ビヤノ
の獨奏に用ふる、歌謡體の樂曲の一種。幽
婉・綿渺の趣致を具ふ。
のきさ 野口〔名〕「地」河内國にありと
いふ地。新古今和歌集に「野口の里に宿借
りて道の芝生の」に今ぞ朝立つ。〔三〕印
南(のき)野の西口の義。播磨國加古郡に
ある村。中國街道に當り、加古川(のき)土山
(のき)二驛の中間に位す。別所長治の幕下
長井四郎左衛門尉の居址、又、教信寺など
あり。

のきさ 野口幽谷〔名〕「人」畫
家。名は誠、通稱は已之助、幽谷はその號、
別に和樂堂の號あり。その先は常陸國那
珂郡野口村より出づ。江戸飯田(のき)町に
生る。家、世世工匠を業とす。建築製圖
の法を學びて、傍ら畫道に志し、椿椿山の
門人となり、二十六年帝室技藝員を命ぜ
られ、三十一年歿す。年六十八。

のきさ 野口寧齋〔名〕「人」詩
人。松陽の子。肥前國諫早(のき)の人。後、
東京に住す。名は式、通稱一太郎。森槐
南に學ぶ。明治三十八年歿す。著す所、大
藏餘光・三體詩評釋等あり。
のきさ 野口念佛〔名〕播磨國
加古郡野口村なる教信寺の念佛會。毎年
八月九日より一週間行はる。一
のきさ 野谷〔名〕「外」出に用ふる靴。一
説に、わらじ草鞋に同じと。字體集「靴
同ノグツ」馬具の一。切付(のき)の縁
に打ちたる、細き金具。

のきさ 野忽那島〔名〕「地」忽那
(のき)七島の一。伊豫國温泉(のき)郡に屬す。
周囲一里半弱。西隣なる陸月(のき)島と共に
、陸野(のき)村を形成す。
のきさ 野桑〔名〕「植」やまきは(山桑)〔名〕

のきさ 野倉野庫〔名〕古の大藏省の倉
庫の一。藥種を納めしもの。なふやくぐ
ら。〔に同じ〕
のきさ 野車〔名〕「植」さるま(旋覆花)
のくるみ 野胡桃 化香樹兜櫨樹〔名〕
「植」胡桃(のき)科に屬する落葉喬木。高さ
七八丈に達し、樹皮は帶黃褐色にして、刺
目少く、葉は奇數羽狀複葉、各小葉は、長
卵形又は披針形にして、細鋸齒を有す。花
は單性、雌雄同株、雄花は穗をなし、雌花
は、その基部に叢生し、夏、淡黃色を呈す。
果實は毬果狀をなし、材質は堅軟中を得、
マツの軸木、下駄の材、又、薪炭用に供
す。根皮は多量の單寧を含めるにより、漁
網及び皮の染料に用ふ。かうだ、どくぐ
みのぶのき。ふてのき。やまぐるみ。

のきさ 野七里〔名〕「地」七里をくると訓
む理由は詳かならず伊豆國田方郡三島
町より箱根に至る間の山中にありて、な
ほ、山七里(のき)嶺七里(のき)と續ける地。
野七里・山七里〔句〕「地」前條を見よ。
太宰記、敵、已に伊豆の府を打ち立て、今
夜野七里山七里を越ゆると聞えし
かば。〔野)の條下を見よ。
のきさ 野くれ 野くれ山くれ〔句〕の
のくわ 匿王〔名〕「人」はし(のき)波
斯匿王の略。會我「波斯匿王、問法、
結縁のために參らせられたり。富樓那
(のき)尊者と申すは、辯舌第一の佛弟子に
てましましけり。然れども、匿王の臣下
の子なり」

のきさ 野草〔名〕「植」百合
(のき)科に屬する多年生の草。原野に自生
し、葉は根莖より生じ、細狀にして長く、
やや彎曲し、葉間より花莖抽出して、高さ
約二尺に達し、夏季、その上部に、黃褐色
の大なる六瓣花、穗狀花序をなして開く。
のきさ 野紅管に同じく、又その物。
のけ 退除〔名〕あふ(のけ)仰に同じ。平道)の
けに倒れて」

のきさ 野草〔名〕「植」百合
(のき)科に屬する多年生の草。原野に自生
し、葉は根莖より生じ、細狀にして長く、
やや彎曲し、葉間より花莖抽出して、高さ
約二尺に達し、夏季、その上部に、黃褐色
の大なる六瓣花、穗狀花序をなして開く。
のきさ 野紅管に同じく、又その物。
のけ 退除〔名〕あふ(のけ)仰に同じ。平道)の
けに倒れて」

ををわ ろれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしざ こけくきか おえういあ

のこま

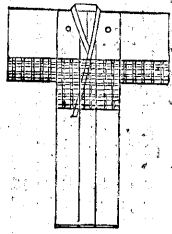
打たぬ舒葺の家にだに居ぬ事にてこそあるに」

のじま 能島・能嶋(名)「地」伊豫國越智(郡)に屬し、來島(名)海峡の東にある島。周回十一里半弱。全島、花崗岩より成り、首邑は宮窪村といひ、北岸に在りて河野氏の將村上氏(後、能島氏)の居りし能島城址あり。一名、大島。「を見よ」

のじま 野島野嶋(名)「地」ぬじま(野島)のじまがさき野島崎・能嶋崎(名)「地」淡路國津名郡野島村(岩屋浦の西)の海岸の、古沖の方へ數町突出しありし時の稱。西國往來の客船の要津たりしもの如く、後世、風波に土石崩壊せりといふぬじまがさき(野島崎)とさし(當島)參照。續拾遺をとめが玉裳の裾や絞るらん野島が崎の秋の夕露」

のじまがさき 野島崎・野嶋崎(名)「地」安房國の極南白濱(名)村の南方に在る岬。明治二年の設立に係る、高さ九十九尺の燈臺ありて光達、晴天には十七海里半に及び、函館・小笠原島・シャトル・タコマ・サンフランシスコ等より來りて、横濱港に入らんとする船舶の目標となる。

のじめ 熨斗目「名」伸(目)の義。縮み目なきよりいふ。地合の縮まず、平なる綾。練貫(名)の、縮み目なく無地なる絹。徳川時代には、紺・茶・緑などの色の、腰の多き、腰のあたりと兩袖の下と



(めし)の

に縞を織出し、五所の紋を附け、五位以下の禮服として、麻上下の下に著用したり。熨斗目の綾(ヤ)「句」前條「に」同じ。桃葉蓑宿老の人は、縮(め)なき熨斗目の綾をも著するなり」

熨斗目の練貫(名)「句」前條「に」同じ。熨斗目の綾(ヤ)「句」前條「に」同じ。熨斗目に仕立てたる袴。

のじめ 熨斗目色「名」藍に少しく

のこま

赤味あるもの。はない。縹(名)色。のじもち 伸餅(名)厚さ四五分ほどに、矩形に、平たく伸したる餅。かはらもち

のじやうぞく 野裝束(名)武士の、旅行する時の裝束。八丈蓑・肚甲(名)に野裝束して、錫粉(名)なる兩刀を横たへし。のじやぶさき 納沙布岬(名)「地」次條を見よ。

のじやぶはんたう 納沙布半島 納沙布半嶋(名)「地」根室國に在る半島。長さ八里、幅約一里半。根室花咲の二郡に互り、突端を納沙布岬といひ、花咲郡に屬す。又、その一角太平洋に突起せる落石崎に、落石の無線電信局あり。

のじゆく 野宿(名)野天(名)に宿すること。又その宿所。露臥。露宿。林葉集遠き處へ罷りはべるとて、野宿して」

のじゆつさう 野出頭(名)「じゆつさう」出頭「を見よ」鷹野などに、君側に侍して、重寶がらるる人。心中實中お家相傳の弓頭、……、六十の皺のよる盡く、御側へ去らずの野出頭、今日も鷹野のお供にて」

のじゆんぎく 野春菊六月菊(名)「植」みやま(名)深山(名)に同じ。

のじらん 野紫蘭(名)「植」百合(名)科に屬する多年生の草。葉は根莖より十數葉づつ叢生し、長さ二尺餘にて、幅狭し。花莖は葉間より抽出して、高さ尺餘に達し、秋季、上部に、帶紫色の花、穗狀花序をなして垂生す。我國南部の暖地に自生す。

のじり 野尻(名)「地」日向國西諸縣(名)に屬する多年生の草。葉は根莖より十數葉づつ叢生し、長さ二尺餘にて、幅狭し。花莖は葉間より抽出して、高さ尺餘に達し、秋季、上部に、帶紫色の花、穗狀花序をなして垂生す。我國南部の暖地に自生す。

のじり 野尻湖(名)「地」信濃國上水内(名)郡信濃尻村大字野尻の東方、斑尾(名)火山の西に在る湖。周回三里二十町、南北に短く、中に一島あり。その水、越後國荒川に入る。一名、芙蓉湖。

のこま

の部分。保馬七寸五分の丸根の、篋中過ぎて篋代のあるを打ちくはせ」

のじり 野代・能代(名)「地」羽後國山本郡に在る町。能代川河口の南岸。能代港あり。古は澤代(名)といひ、阿倍比羅夫の蝦夷を討ちし地。のじりゆんけい(能代春慶)の略。梅暦月諸共に横にさす櫛も、野代の本櫛木(名)」

のじり 篋白(名)戰場にて、まばらにしらけたるさまなるべしといふ。太本記だ一騎、踏み止まりて戦ひ、返し合ひては切つて落し、八方をまくつて驅ひけるに、左衛門佐の兵ども、篋白に成つてぞ見えたりける」

のじりゆんけい 能代春慶野代春慶(名)次條に同じ。

のじりゆめり 能代塗野代塗(名)羽後國山本郡能代邊より産する春慶塗の漆器。製品は、桐・廣蓋・重箱などに、色淡く、黄なるが多く、木質透きて見え、上品なり。秋田春慶。能代春慶。能代部。

のじろほねのしろ骨(名)鳥の胸の一のじろみなと 能代港(名)「地」羽後國山本郡能代町の港。和船・小蒸氣船のみにて、汽船の如きは一里の沖に碇泊し、冬季、西風荒き時は、航海停止となる缺點はあれど、背後の地より産する米・穀・材・木・礦物等の産物は、皆、こより横出す。

のじをん 野紫苑(名)「植」ささぎ(名)主澤小車)に同じ。

のす 載す「動下二他」あけて、上に置く。乗らしむ「乗す」背きしする。かかぐ。のぼす。記録す。登載す。記載す。掲載す。目録略にかかるとに。口車(名)に乘す。はむ。「乗す」色違大鑑(名)を拵へ、人をのせて思ひよらする貌。調子に合ふやうに。薩摩監三味線にのせて誦ふは」

のす 伸す「動四自」勢よく伸ぶ。伸びて張る。「紙簾」の絲、伸す「蛇が伸す」地位又は身代、次第によくなる。のしあがる。發展す。目行き著きたる土地よ

のこま

り、更に進む。新永代馬のしのして、自身、江戸に下り」

のす 伸す「動四他」勢よくのぼす。のばし張る。小世繼、髪のかかり、水をのしたるやうに冷やかにて」

のす 字、鷺・野、己呂毛乃須、大鷲、かのほとのごもれるむしろをば、暖かにおし撫てぞ寝させ奉りたまふ」

のす 如す「接尾」なす(如す)の轉。「古語」萬葉利根川の河瀬も知らずただ渡り波にあふす逢へる君かも」

のす 野簀(名)「植」すすだけ(水簀)にすすき野簀(名)「植」野に生えたるすすき。ぬすすき。ぬ(蘭)に同じ。

のす 野筋(名)庭に、野の道筋に擬して設けたる道筋なるべし。「古語」拾玉夏木立庭の野すすの石の上のみちて色濃き深見草かな」

のす 野筋交(名)前條を見よ。のす 野筋 新六「見渡せば野すぢまじりの道のべにたえだえ遠き草の原かな」

のす 野摺(名)黄布に柏を摺りたる、隨身著用の服。のす 野鷲(名)猛禽類に屬する鳥。我國中部以南の地に棲み、高よりややく、羽色、背面は淡褐色、頭及び後頭部に



のぞむ

人民に對す。治者として、被治者に對す。君臨す。「在む・泣む」「天下に臨む」國に臨む。「衆に臨む」身分高き者、身分卑き者の許に行く。貴人、親しくその場に到る。臨場す。來臨す。「式場に臨む」或時又或場合に於たる。さしかかる。對す。際す。「その時に臨みて」「局に臨む」のぞむ望む「動四他」遠く離れて見る。見遣る。ながむ。「ねがふ。こひねがふ。欲す。所望す。希望す。志望す。目仰ぐ。慕ふ。仰望す。その徳を望む」相「望む」句「やや離れて相對す。雙方離れて向きあふ。「東西相望む」「海を隔てて相望む」

のぞむらくは望むらくは「副」らくは、おそろくは恐らくはなどの語の類推によりて、添加したるもの。のぞむことは。願ふ所は。なるべくは。なにとぞ。のぞん「名」次條の語の轉義ののぞりに同じ。

のぞん「貌」のぞりの音便。のぞら「野そら」名「植」かきもち「藨本」に同じ。「古語」字屬藨茶乃曾良志「日」さるさるは「藨藨」に同じ。「古語」字屬藨藨乃曾良自。一云、佐留加支「のぞり」貌。愚めきて、のびのびとせるさま。他の多忙・心配などにも氣附かずし済ましめるさま。のぞり。のほんのほほん。八笑人「若侍にせき立てられ、のぞりと出でたる形」を見れば。

のた「名」ぬた「餛」の轉訛。のた「名」次條を見よ。「同じ。のたを打つ」句「のたうつ」のた打つにのた野田「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のた野田「名」地「下總國東葛飾郡」都にある町。醬油の産出を以て著る。鐵道常磐線の柏驛に通ずる輕便鐵道あり。日もと攝津國西成「郡」に屬し、今は大阪市北區に編入せられて、野田と云ふ地の舊名。福島に西に接し、鐵道西成「線」の一驛たり。又、東部に春日神社ありて、藤花を以て開ゆ。鬼貫「野田村に親あへり藤の頃」八笑人「ぼたり、ぼたり、一、粒十六文位な涙を落し、鼻の先へ網渡をさせて、鼻の半ばへ暫く保つ。名附けて野田の下藤」といふ涙をどうしてこぼした」日「攝津國東成郡」にある村。附近に鐵道河南線の網島驛及び櫻宮「驛」あり。天の網島京橋を渡れば、野田の入江の水煙、南無あみみの大長寺。

のたふ

のたふ「餛」ぬた「餛」の轉訛。のたふ「名」次條を見よ。「同じ。のたふを打つ」句「のたふ」のた打つにのたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたふ

のたふ「餛」ぬた「餛」の轉訛。のたふ「名」次條を見よ。「同じ。のたふを打つ」句「のたふ」のた打つにのたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたふ

のたふ「餛」ぬた「餛」の轉訛。のたふ「名」次條を見よ。「同じ。のたふを打つ」句「のたふ」のた打つにのたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたふ「名」野の中にある田。新船造「山里は秋を松風ことしらぶ野田刈る」は千代うたふなり。

のたまはく 宣はく・曰く【動他】『のたまふ(宣ふ)の延(はく)はく(曰く)の敬語。のたまひけつ 宣消つ【動四他】ひけつ(言消つ)の敬語。源氏「人のとかく言ふを、よからぬ者どもも言ひ出づる事と、聞きにくく思ひて、宣ひ消つを」

のたまふ 宣ふ・曰ふ【動四他】『宣(り)給ふの略』(言ふ)の敬語。

のため 篋撓 篋矯【名】矢の篋の反(の)を矯め直すこと、又その具、すぢかひに溝を彫り刻みたる細き木に、篋を入れて、矯む。太平記「金鐵(きんてつ)二つ、篋撓に取添へて、道道撓め直し、爪より」

のため ぬた 篋撓形 篋矯形【名】『篋撓の形に似たる形の義』ななめ。すぢかひ。(多くは、水流を横切る状態に)太平記「高聲に呼はりて、篋撓形に、流をせきてぞ渡しける」(鳥驚含義)大手は、出雲路を過ぎて、道祖神(みちのそと)の前を、篋撓形に、中鳴へかかるとし

のたらし 野櫛 獨活【名】『植(うゑ)る(獨活)に同じ。』古語。字義「獨活、字度。又云、乃太良」

のたらし たり 観【名】のたらしに同じ。今國姓爺「山坂を、のたらしと立ち歸る。のたり 観【名】ゆるやか。ゆたたり。だらり。のたり。のたり。のんどり。太藪、刀豆(やぶ)のたりと下(くだ)る花まじり」

のたり 観【名】のたり込む【動四自】だれたる態度に入り込む。和合人「草臥足(くさばた)を引き引き、兼ねての定の通り、大黒屋(おおくろや)のたり込めば」

のたり 観【名】のたり出る【動下一自】だれたる態度に出て。八笑人「なんの。又のたり出るよ。燕雀、何ぞ大鷲の心を知らん」

のたり 観【名】のたりを重ねていへる語。のたらし。養村「春の海終日(しゅうじつ)のたらしかな」

のたまはる のたり廻る【動四自】のたりつづ廻る。おざりまはる。のたくりまはる。蘆屋「蒲内(かき)助(すけ)と眉間(まへま)に大疵(おほきず)つけ、のたりまはって死してけり」

八笑人「のたり廻って、やうやうと、下道通り(げだうどおり)ければ」く。のたくる。のたる【動四自】のたりのたりと這ひゆのたるき 野極【名】『の(野)は接頭語』鈍削(どんせう)を施さざる様、けしやたるき(化粧様)参照。

のたれ 濁【名】のたれみだれ(濁亂)の略。のたれじに 野倒死【名】のたれて死ぬること。ゆきだふれ。

のたれ ぬた 濁亂【名】焼刃(やきば)の。一、大きく捲れて、所所、少し数多く亂れ、浪のうねりのごとき形なるもの。のたれやきば 濁焼刃【名】前條に同じ。のたれ ぬた 野倒れる【動下一自】『野倒は假借の文字』路傍などに、のたうちて倒る。のたりにて死ぬ。

のち 後【名】『あと。うしろ。後方(きり)』背後(きり)。先に對して。『つぎ。さき。あと。未來。後來。』前に對して。『死にたるあと。死後。』後(きり)の人の後には誰れに中間はん。正統記「後の號をば、仰のまゝにて、後醍醐天皇と申す」四血筋の末。す。のちどころ。子孫。後胤。末葉。枕「元輔(もとすけ)がのちといはるる君しも、こよひの歌にがづれてはるる」

後、悔【名】『後悔(きり)』後(きり)になりて、くちをし。後悔(きり)すべくあり。榮生「後くやしき大將とも聞えぬべし」

後の秋【句】次の年の秋。明年の秋。新勳人「は皆後の秋とも頼むらん今日をわかれと散る紅葉かな」

後の朝【句】次條に同じ。佛蘭西遷葬(しんざう)の香(か)は「はつち後の朝」

後の朝【句】『ごてう(後朝)』に同じ。枕「後のあしたは、残多かる心地なんする」

後の葵【句】賀茂の祭の日、簾などに懸けたる葵を、祭の過ぎたる後まで、取去らずに置きたるもの。四季物語「玉だれに後の葵はとまりけり枯れても通へ人の面影」徒然「祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、或人の御簾(みすだ)なるを

皆取らせられはべりしが」

後の菖蒲【句】端午の節の過ぎたる時の菖蒲。「六日(むいっぴち)の菖蒲参照。四季物語「六日と聞ゆるには、後のあやめ奉るもあやし」

後の一日【句】月の二十一日。弘法大師の忌日なり。以呂波(いりは)今日(けふ)は、彌生(やよひ)の一日、大師(おほし)御入定(ごにやうぢやう)の會式(くわいしき)なれば、若き人々を偕(いっしょ)ひ、東寺へ参詣(さんぎ)仕り候」

後の諱【句】『おくりな(室)』に同じ。大藏後の御(ご)いみな、忠義(しゅうぎ)と申しし」

後の五【句】の百年(ひゃくねん)【句】『佛(ぶつ)ごひやうねん(後五百年)』に同じ。増鏡「驚の御山の月の影、鶴の林に入りしより、經にける年を數ふれば二千年(にせん)を過ぎはてて、後のいつつの百とせになりけるこそ悲しけれ」

後の親【句】ままとや(繼親)に同じ。源氏「その母君(ははきみ)按察(あんさつ)の大納言(だいなごん)の北方(きたかた)になりて、……、後の親に譲らん、いとあいなしとて」

後の菊【句】重陽の節を過ぎたる菊の。のこりの菊。殘菊(ざんきく)。芭蕉(ばしょう)見どころのあふ屋(や)のわきの後の菊」

後の悔【句】『こころ(後悔)』に同じ。源氏「源氏聞きすぎんは、後のくい、心苦しう」

後の悔【句】先に立たず【句】『後悔(きり)』先に立たず【句】に同じ。『謬語』今書「後の悔前に立たずといふ言にてぞありける」

後の事【句】『後日の出来事。』養蓮(やうれん)むかひに立てたる車を斯くするは、何(なに)ぞ。後の事思ひてよ。あたせん」

後の五百歳【句】『佛(ぶつ)ごひやうさい(後五百歳)』に同じ。太平記「我は、この山の王となりて、久しく、後の五百歳の佛法を護るべしと、誓約(ちやくやく)をなし」

後の今宵【句】『今(こん)宵(よ)』に同じ。後の三男【句】『さん(三男)』に同じ。見よ。

後の十才子【句】『じ(十才子)』に同じ。後の師走【句】『し(師走)』に同じ。『後(ご)の月』を見よ。『閏(うる)十二月。』閏十二月、ノチノシハス」

後の炭【句】茶の湯にて、薄茶(うすちや)のみ、火衰(ひすい)たる時、再び炭を繼ぎて、湯の沸き立つやうにすること。のちずみ。

後の千金【句】大金も、時機(とき)おくれれば、救助(きうす)の効を失ふ。後の百より、今の五十。『謬語』字道(しどう)今日の命、物食はずば生(な)くべからず。後の千(せん)のこがね、更に益(えき)なしとぞいひける。それより、後の千金といふ事、名譽(めいよ)せり」

後の月【句】『後の師走(し)』を見よ。次の月。來月。『うらぶき(閏月)』に同じ。『八月十五夜の』に對して、後といふ。『さん(さん)』に同じ。佛蘭西遷葬(しんざう)「折り敷いて御室(ごむろ)に」見ばや後の月」

後の月見【句】『前條を見よ』陰曆九月の出替(でか)【句】八月二日に於ける下男(しもや)下女(したむすめ)の出替。

後の彼岸【句】『春の彼岸に對して、後といふ』秋の彼岸。後の雛【句】次條に同じ。滑稽雜話(ごうきざわ)「今、また、九月九日に賞する兒女多し。俳諧(はいかい)これを名づけて、後の雛とす」

後の雛祭【句】『重陽の節に、雛人形を飾ること。』後の百より、今五十【句】『後の千金』に同じ。『謬語』

後のふ【句】『ふは』と發音す。伊呂波歌にて「う」より後方に在るよりいふ」

のと能登(名) 〔地〕北陸道七國の一

羽咋(名) 鹿島(名) 鳳至(名) 珠洲(名) 四郡に分れ、全國、石川縣の管轄に屬す。萬島とよき立て舟木伐るといふ能登の島山今日見れば未だ繁し、幾代神びぞ。〔地〕能登國鹿島(名) 郡の古稱、中世に至りて、その名を失ひ、寛文十一年、古名に復し、元祿十三年、再び鹿島郡とす。〔淳仁天皇の天平寶字七年、始めて、高麗に遣しし船の名。〕

のと喉咽(名) 〔名〕〔吞處(名)の義〕口腔の奥、食道と氣道との通ずる處。のむど。のんど。のぞ。咽喉(名)。こうさう(喉頭)。いんさう(咽頭)参照。うたふ時の聲。うたご。のどが好い。のどを開かず。吞世昌(名) 顔の美しいに似合はぬ咽喉(名)の太さと、えらいとす聲は。〔空穂(名)の一部。四新聞の二枚つづきの中央なる欄外。即ち二つに折りたる折目の部分に當れる、細長き欄。〕

喉が乾く(句) 〔句〕飲物を欲す。渴す。 〔他を羨む。〕

喉がぐびぐびす(句) 酒を見て、飲みたさに堪へぬさま。喉がぐびつく。和合。喉がぐびぐびして、たまらねえから、ずと押上て吞んだが。 喉がぐびつく(句) 前條に同じ。

喉が鳴る(句) 美食酒などを見て、さかんに飲食の慾を催す。のどづみ(喉鼓)参照。 〔好み欲する物事を見聞きて、得んとする心、切に起る。〕

喉が引附(名) 〔句〕甚しく喉がかわく。 〔笑ふ〕あゝ、喉(名)がひつくやうだ。 服公(名) 湯でも、水でも、一杯下し。

喉が干(名) 〔句〕飲食の料を得ること能はず。生活の道立たず。新永代(名) 近年高き八木(名)に、下直(名)なる職、すこしも油斷しては、忽ち咽の乾る事ぞかし。 〔同じ。〕

喉から手が出る(句) 喉が鳴る(句)に喉過ぐれば熱さ忘る(句) 喉元(名)に過ぐれば、熱さ忘る(句)に同じ。〔諺語〕

日蓮外書「世俗の譬に、喉過ぐれば、熱さ忘れ、病癒ゆれば、醫師忘る」

喉の鍵(名) 〔句〕咽喉を、鈎にて引掛け、ある物と考へていふ語。抱狩御本地上野咽の鍵、舌の鈎、頭の落つるほど。 喉の掛金(名) 〔句〕前條に同じ。室町千歳殿「喉の懸鑑(名)、首の骨、がっくり折れ」

喉の鎖(名) 〔句〕咽喉を、生命を繋ぎとむる物と考へていふ語。長町女房切喉の鎖を、一刀、うんとばかり、目もくれなむ。 喉の下へ這入る(句) 人をおだて、裏面に在りて、利を占む。 〔同じ。〕

喉の小舌(名) 〔句〕のど(名)の喉小舌に喉より劍(名)を吐く(句) 甚しく苦痛なる譬。〔諺語〕 要道(名)咽より劍を吐くとも、これ程にはあるまじ。 咽を扼して、背を拊(名) 〔句〕揚雄の解嘲に「西排強秦之相、三其咽、抗其氣、拊其背、而奪其位」又、史記の劉敬傳に「與、人、不、下、其、咽、抗其背、未、能、全、其、勝、也」とあり。前後兩面より抑へつけて、避くるに路なからしむる譬。〔諺語〕

喉を締め、息(名)をする(句) 初は苦しけれども、後には易き譬。〔諺語〕 喉を縮める(句) 人をこまらす。人を窮地に落しめる。 喉を通らず(句) 苦痛恐怖などのために、飲食の慾無くなる。胸算用、この親仁(名)、顔色變つて、箸持ちながら、集汁(名)、喉を通らず。

喉を通る(句) 飲食物、喉を通過す。 喉を止(名)める(句) 飲食物を欲する者に與へず。無善(名)無惡(名)吞む者は、畜生でも吞むが、盛らしやる人こそは、結構な人なり。情ないやぬかいて、男の喉を止める。出てうせをせ。

喉を鳴らす(句) 喉が鳴る(句)に同じ。 〔と〕 〔貌〕のどか(長閑)に同じ。〔古語〕萬葉「あすか川しがらみ渡せしかなせは流るる水ののどにかあらまし」續萬葉(名)

のへこそ死なめのどには死なじ

のどあみ 喉網(名) 漁網の一部。一旦網に入りたる魚類の逃げ出づるを防ぐため、囊網(名)の口又は中央部に取附けた網(名)。網(名)もこの類。 〔と〕 〔網(名)もこの類。〕

のどか 長閑(名) 〔事〕無く静かなるさま。落ちつきてあるさま。なだらかな。おだやか。ゆったり。のんびり。のど。のどやか。のどろか。のどろか。のんどり。のつとり。のどど。ゆったり。などやか。平氣。悠然。悠悠。拾遺「涙川のどかにだれ流れなん戀しき人の影を見ゆると和泉式部集「物をみおほひの家を出てこそそのどかに法(名)の聲を聞かまし」榮花「玉も、少し磨きたるは、光のどかなるやうにもあり」 天氣のおだやかなるさま。空晴れて、うららかなるさま。のどやか。のどろか。のどろか。源氏「風は、いと強吹くけれども、日のどかにて」太師「紙薫(名)白し長閑過ぎての夕ぐもり」

のどかけ 長閑(名) 〔貌〕のどからしきさま。榮玉御使、しきりに參れども、なほ例あらずのみ思されて、のどかけなる御氣色なり。 〔と〕 〔貌〕のどからしきさま。

のどかは 能登川(名) 〔地〕大和國の春日(名)山より發し、三笠山の麓を流れて、佐保川に入る川。萬葉「能登川の水底さかへ」に於て三笠の山は咲きにけるかも。 〔と〕 〔地〕大和國の春日(名)山より發し、三笠山の麓を流れて、佐保川に入る川。萬葉「能登川の水底さかへ」に於て三笠の山は咲きにけるかも。

のどがは 能登川(名) 〔地〕近江國神崎郡にある村、琵琶湖畔の一港として、もとは汽船の寄航ありたれど、今は廢絶す。麻布を産す。鐵道東海道線の能登川驛は、隣村五峯(名)村にあり。 〔と〕 〔地〕近江國神崎郡にある村、琵琶湖畔の一港として、もとは汽船の寄航ありたれど、今は廢絶す。麻布を産す。鐵道東海道線の能登川驛は、隣村五峯(名)村にあり。

のどかやま 能登香山(名) 〔地〕美作(名)妙國龍王(名)山の別稱。萬葉「能登香山の山も誰が故か君來ませるに紐解かず寐む」 〔と〕 〔地〕美作(名)妙國龍王(名)山の別稱。萬葉「能登香山の山も誰が故か君來ませるに紐解かず寐む」

のどくひ 喉頭(名) 〔名〕喉と頸との邊のどくび。 〔喉頭を締めれば呼吸とどまりて死ぬるよりいふ〕肝要なる處。のどくび。咽喉。 〔と〕 〔名〕喉と頸との邊のどくび。咽喉。

化病の一種。一種の桿狀菌の寄生に因りて發し、第一環節乃至第五環節の間、膨脹して、黒褐色を呈す。

のどけ 喉氣(名) 〔醫〕炎症のために、咽頭の粘膜赤く腫れて、飲食の嚥下に苦痛を感じ、又、喉頭も、多少赤く腫れ、聲帯に波及すれば聲腹れ、又は全く發聲しえざるに至る病。發熱し、頭痛、頭重、食氣不進及び全身の倦怠を惹起す。 〔と〕 〔醫〕炎症のために、咽頭の粘膜赤く腫れて、飲食の嚥下に苦痛を感じ、又、喉頭も、多少赤く腫れ、聲帯に波及すれば聲腹れ、又は全く發聲しえざるに至る病。發熱し、頭痛、頭重、食氣不進及び全身の倦怠を惹起す。

のどけし 長閑(名) 〔形〕のどかなるさまなり。しづかなり。おだやかなり。うららかなり。萬葉「花に似ずのどけきものは春霞たなびく野邊の松にぞありける」萬葉うしろやのどけき所に強くば、うはへの情は、おのづからもつけつべきわざをや。 〔と〕 〔形〕のどかなるさまなり。しづかなり。おだやかなり。うららかなり。萬葉「花に似ずのどけきものは春霞たなびく野邊の松にぞありける」萬葉うしろやのどけき所に強くば、うはへの情は、おのづからもつけつべきわざをや。

のどくびと野床人(名) かりそ(名)狩人に同じ。〔古語〕家持集「のどく人すらんししを捕らんとていはやの中にくさびけふ立つ」秘藏抄「うち群れすがる狩るなるのどく人弓弦(名)しみに打鳴しつ。……のどく人とは、獵師を云ふなり」 〔と〕 〔狩人に同じ。〕

のどくみ 能登小富士(名) 〔地〕ふたごやま(二子山)の異稱。 〔と〕 〔地〕ふたごやま(二子山)の異稱。

のどくみ 喉嚨(名) 咽(名) 和船の一部。二枚水押(名)の二枚の間の處。 〔と〕 〔和船の一部。二枚水押(名)の二枚の間の處。〕

のどさは 能登嶺(名) 〔動〕能登國の海に、却て東海にて多く漁獲せらるるといふ。一代男能登嶺十刺。 〔と〕 〔動〕能登國の海に、却て東海にて多く漁獲せらるるといふ。一代男能登嶺十刺。

のどさんみやく 能登山脈(名) 〔地〕能登國にありて、西南より東北に連なり、その國北部の脊梁をなせる山脈。森林少なく、田園邑里、その間に發達せり。一名、鳳至(名)山脈。 〔と〕 〔地〕能登國にありて、西南より東北に連なり、その國北部の脊梁をなせる山脈。森林少なく、田園邑里、その間に發達せり。一名、鳳至(名)山脈。

のどやうぶ 能登上布〔名〕能登國鹿島〔郡能登部〕村の邊より産出する上布。經緯共に上等なる手紡の麻絲又は苧麻〔註〕絲を用ふ。安部屋〔註〕のちぢみのとちぢみ。徳丸〔註〕のちぢみ。

のどせがは 能登瀬川〔名〕〔地〕大和國廣瀬川の支流。萬葉ささ波やいそせぢなるのとせ川音のさやけさきつ瀬とに。

のどぢぢみ 能登縮〔名〕のどぢぢみ能のどぢぢみ 喉んこ〔名〕のどぢぢみ 喉小舌に同じ。〔俚語〕

のどぢぢやう 喉疔〔名〕なうそ〔腫瘍〕に同じ。〔音便〕

のどづくび 喉頸〔名〕のどづくび〔喉頸〕のどづくび 喉鼓喉鼓〔名〕喉が鳴る。〔見よ〕食慾を盛んに催すこと。

のどづんばい 喉づんばい〔名〕『づんばいを見よ』固睡〔註〕を呑み込みて、待ちあること。舞臺〔註〕についてはたしかに實のあるやつ、通しはせじと、のどづんばい、先づは、それとも知らねども、心から吹く臆病風。〔見よ〕

のどとめ 喉留〔名〕喉に、とめを刺すこと。何ぞ何ぞふ、のとめと申す事は、不審の事に取りていふ義なりと。五郎、いやいや、全く、さにあらず、敵を打つた法なり。〔見よ〕

のどとど 喉 基だのどかなるさま。ゆったり。悠悠。悠然。狭き大かたは、いとものさきがし、いそがしげなる頃なれど、この御かたには、のどとどとして。〔見よ〕

のどとど 能登海苔〔名〕能登國より産する海苔。其根葉ののどとど。能登の海苔のすずみ崎に寄る波もふり捨てがたき玉藻とぞ見る。〔見よ〕

のどとど 喉小舌〔名〕軟口蓋の後方の尖端の、喉の上方より垂れてあるもの。のどとど。のどとど。ひこ。懸垂垂。

のどとど 能登比女神社〔名〕能登國鹿島〔郡能登部〕村大字能登部下に鎮座せる神社。祭神は能登比咩〔註〕神、彦名城入姫〔註〕命。創立年代詳かならず。延喜の制、小社に列す。

のどとど 能登比咩命〔名〕機織の技を守護する女神。大己貴〔註〕命、少彦名〔註〕命と共に天下を經營し、能登國能登部に至りし時、命の機杼の聲を聞き、就きて、食を求めたまひし時、神綱を奉りきと傳ふ。

のどとど 喉笛喉吹〔名〕喉の、氣管の通じてある所。からびえ。のむどぶえ。のんどぶえ。ふえ。

のどとど 能登部〔名〕〔地〕能登國鹿島〔郡能登部〕村。七尾〔註〕町と羽咋〔註〕町との中間。能登上布の主産地。鐵道七尾線の停車場又、能登比女神社あり。

のどとど 喉佛〔名〕成年男子の喉の中間にありて、甲状軟骨のために凸起せる所。のどばね。

のどとど 喉骨〔名〕前條に同じ。

のどとど 松〔名〕〔植〕くろまつ〔黒松〕に同じ。

のどとど 能登四目〔名〕のどかになる。ゆつたりとなる。源氏すこし、心のどまりて。なだまる。源氏すこし、心のどまりて。のどむ〔動下二他〕のどまるやうにす。おちつかしむ。ゆるやかにす。しづむ。なだむ。源氏よろしき際になれば、皆、思ひのどむる方ありてこそ見果つなれ。〔見よ〕

のどとど 喉元咽元〔名〕喉の根もと。喉の口もと。のど。

のどとど 喉元過ぎて、熱さ忘るる〔句〕苦しき時は、人を頼み、その時過ぐれば、忽ちその恩を忘るる譬。喉過ぐれば、熱さ忘る。〔語譯〕

のどとど 能登思案咽元思案〔名〕はななきあん〔鼻先思案に同じ〕のどやか 長閑やか〔名〕のどか〔長閑〕に同じ。源氏、いとこのどやかに、今しもあらまほしき御ありさまなり。〔見よ〕

のどとど 能登四目〔名〕咽ぶに似たる合聲〔註〕にて呼ぶ。〔古語〕萬葉賦〔註〕には蜘蛛の巣かきて飯〔註〕炊く事ものどとど 能登四目〔名〕咽ぶに似たる合聲〔註〕にて呼ぶ。〔古語〕萬葉賦〔註〕には蜘蛛の巣かきて飯〔註〕炊く事

のどとど 能登鳥ののどとどをるに。〔見よ〕

のどとど 長閑らか〔名〕のどか〔長閑〕に同じ。鶴龜斯く日頃目がれて、いかなるもの、のどらかに打置きたるものと見えぬ癖なんありける。〔見よ〕

のどとど 野取〔名〕野にて捕ふること。

のどとど 野取の駒〔句〕牧場より新に連れ來れる駒。夫々、おくの牧の野取の駒の片なつてともすればまた荒るる君かな。〔見よ〕

のどとど 野鳥〔名〕野生の鳥。人に馴れぬ鳥。野鳥〔註〕。

のどとど 野鳥の蹴立〔名〕〔句〕早まり過ぎたる考の譬。捕らぬ狼の皮算用。〔語譯〕

のどとど 則る〔動四自〕のどる〔則る〕の略。〔古語〕名義抄、則、ノトル・ノリスナハチナズラフ。〔見よ〕

のどとど 能登呂半島〔名〕〔地〕樺太〔註〕にある半島。南方に斗出し、東方知床〔註〕半島との間に、亞庭〔註〕灣を抱く。長さ南北約二十餘里、幅四里。

のどとど 能登輪〔名〕武具の一。鎧の下に著け、頭の下より喉の邊にかけて、胸板のはづれを蔽ふもの。上部に月形〔註〕と呼ぶ、鐵製の部分ありて、それに附けたる緒を懸緒といひ、小札〔註〕は、二段より成り、各段とも、裾の方開きて、扇の地紙を倒に二段重ねたるが如きを、韋にて、月形に取附く。のどとど 能登輪攻〔名〕相撲〔註〕柔術などにて、敵の喉元を攻めつけて、全身の力を失はしむること。

のどとど 野中〔名〕野のなか。はらなか。

のどとど 野中〔名〕野のなか。はらなか。

のどとど 野中〔名〕野のなか。はらなか。

のどとど 野中〔名〕野のなか。はらなか。

のどとど 野中の一本杉〔句〕野中に在る一本の大木の杉。孤獨なる譬。ひとりばつち。〔語譯〕

のどとど 野中の清水〔名〕〔句〕野中に在る清水。のなのけしつ〔野中清水〕参照。古今にいしへの野中の清水ぬるけれど、もの心を知らぬ人ぞ汲む。〔前記〕、古今集の歌にもとづきたる語。もと連添ひてありし女。一説に、いさひ〔後妻〕の異稱ともいふ。

のどとど 能登中〔名〕能登の中ほどの部分。保元七寸五分の丸根の、能登過ぎて能登代〔註〕のあるを打ちくはせ。〔語譯〕、その矢、妻月に、能登射込みたり。〔見よ〕

のどとど 能登中〔名〕能登の中ほどの部分。保元七寸五分の丸根の、能登過ぎて能登代〔註〕のあるを打ちくはせ。〔語譯〕、その矢、妻月に、能登射込みたり。〔見よ〕

のどとど 能登中〔名〕能登の中ほどの部分。保元七寸五分の丸根の、能登過ぎて能登代〔註〕のあるを打ちくはせ。〔語譯〕、その矢、妻月に、能登射込みたり。〔見よ〕

のどとど 能登中〔名〕能登の中ほどの部分。保元七寸五分の丸根の、能登過ぎて能登代〔註〕のあるを打ちくはせ。〔語譯〕、その矢、妻月に、能登射込みたり。〔見よ〕

のどとど 能登中〔名〕能登の中ほどの部分。保元七寸五分の丸根の、能登過ぎて能登代〔註〕のあるを打ちくはせ。〔語譯〕、その矢、妻月に、能登射込みたり。〔見よ〕

のどとど 能登中〔名〕能登の中ほどの部分。保元七寸五分の丸根の、能登過ぎて能登代〔註〕のあるを打ちくはせ。〔語譯〕、その矢、妻月に、能登射込みたり。〔見よ〕

のどとど 能登中〔名〕能登の中ほどの部分。保元七寸五分の丸根の、能登過ぎて能登代〔註〕のあるを打ちくはせ。〔語譯〕、その矢、妻月に、能登射込みたり。〔見よ〕

のどとど 能登中〔名〕能登の中ほどの部分。保元七寸五分の丸根の、能登過ぎて能登代〔註〕のあるを打ちくはせ。〔語譯〕、その矢、妻月に、能登射込みたり。〔見よ〕

のどとど 能登中〔名〕能登の中ほどの部分。保元七寸五分の丸根の、能登過ぎて能登代〔註〕のあるを打ちくはせ。〔語譯〕、その矢、妻月に、能登射込みたり。〔見よ〕

のどとど 能登中〔名〕能登の中ほどの部分。保元七寸五分の丸根の、能登過ぎて能登代〔註〕のあるを打ちくはせ。〔語譯〕、その矢、妻月に、能登射込みたり。〔見よ〕

のむらになんざい野野村仁清名〔人〕
 陶工。丹波國桑田郡野野村の人。通稱は
 清兵衛後、清右衛門と改む。製陶の法を
 京師に學びて、遂に一家を成し、仁清焼の
 名あり。茶家金森宗和に愛せられ、益を
 受けし所妙からずといふ。野野村播磨大
 塚藤原正廣入道と稱し、萬治年間、御室
 公に歿す。一説に、寛文六年歿す。仁清
 の號は、仁和寺宮より、特に仁の一字を賜
 はりしものといふ。

ののめく〔動四目〕のしを〔に〕同じ。〔古
 語〕字並見人、皆のめき感じ、或は泣
 きけり。太平記あれ見よとのめきとい
 のはうづ野方圖〔名〕『の野』は接頭語
 はうづ方圖を見よ。不謹慎に振舞ふこ
 と。ふしだら。のふづ。放縱。番頭員あ
 たりに人様も御座らっしゃんねえ様に、野
 方圖な奴等〔の〕ぢやあねえか。

のはか野墓〔名〕野中にある墓。野邊の
 墓。五人女〔源五兵衛〕この家に伏し沈み
 て、……野墓より、すぐに髻切て。胸裏
 用〔夜半過に葬禮致します。御苦勞なが
 ら、野墓へお出願みます〕

のはかま野袴〔名〕江戸時代に、裾に、
 黒天鵝絨の文などにて、廣き縁を附け、
 武士の旅行又は士民一般の火事の時など
 に著用せし袴。
 裕のは、上流
 の者は、緞子の
 の錦などにて
 仕立てたるを
 用ひ、下輩は、
 縞織物を用ひ、幕府御用達の町人は、平
 日の出仕に羽織を着て、この袴を穿ち
 又、この袴着用時は、すべて紺足袋と定
 まりゐたり。ふんじみはかま〔踏込袴〕の
 く野服参照。

のはき野萩〔名〕〔植〕野に生えてあ
 る萩。萬葉集に紫たが袖掛けし衣ぞと見
 ゆるは秋の野萩なりけり。日きはぎ〔木
 萩〕〔に〕同じ。

のはくち野博打〔名〕野原にて博打を
 すること。又その博打。俳諧新選巻先〔野

(ま) (か) (ば) (の)



のはす

ばくちや燈(ひかり)によるの鹿の角」
 のはす 筈筈(名)やはす(矢筈)を
 のばす 延ばす 伸ばす(動四他)「長く、高く、又は廣く。寸法・距離又は面積を多くするのぶ。ゆたかに。盛大ならしむ。身代を延ばす。時間又は時日をおくれしむ。長びかしむ。延引せしむ。遅延せしむ。のぶ。図水などを加へて、薄くす。溶かす。のぶ。稀釋す。一糊を延ばす。遠く逃げゆかしむ。落ちのびさす。字彙 乗りたる馬……いみじき逸物(名)にてありければ、幾ばくも延ばさずして捕へたるに」平家源三位入道……、次男源太夫の判官兼綱は……、父を延ばさんがために、返し合せ返し合せ戦ふ」

のはた 野畑・野畠(名)「野と畑と。野にある畑。(山畑に對して) 心中二枚草 野何れも野畑へ出でたれば、誰に首尾問ふ便(き)も無く」
 のはたけ 野畑・野畠(名) 前條(前)に同じ。 獵養史記「野畑や雁追ひのけて摘む若菜」
 のはたき 野畑・野畠(名)「植やまはたき(山旗竿)に同じ」

のはづれ 野外(名) 野原を出離れんとする所。町より遠く隔たりて、人家など稀なる土地。野のはづれ。のばなれ。野外。郊外。五人芝野はづれに行けば、紅林に時(とき)争ふ小鳥を見掛け」 「に同じ」
 のはど 野鳩(名)「動」かはらばど(河原鳩)のばど 野話(名)「野天(てん)にて談話すること、又その談話」

のはなむ 野放(名)「禽獸などを、野に放ち飼ふこと。のび。はなしがひ。小供などを思ふままに行動せしめて、干渉せぬこと。放任」
 のはなれ 野離(名)「のはづれ(野外)に同じ。 奥書 野ばなれや風に吹き来る蟲の聲」

のばはる 延ばはる(動四自)「次條の語より派生したる語」(延ば)に同じ。
 「古語」空種「この朝臣見る時こそ歸のばはる心地すれ」

のび

のびふ 延ばふ(動下二他)「のぶ(延ぶ)の延。(古語)後鳥數知らず君が歸を延ばへつ名たたる宿の露とならん」
 のぶ 述ば(動下二他)「のぶ(述ぶ)の延。(古語) 古今契符のよのぶること無かりせばいかほの沼のいかにして思ふ心をのばへまし」 鶴聲 詮度の評定をば延ばへなどして、雑談は何事ぞ」
 のはら 野原(名) 野と原と。野。原野。平原。郊野。

のほら 野薔薇(名)「植」のほら 野薔薇のほらね 野原猫(名)「のね(野猫)に同じ。 漢歩色集 野原猫(但し、或は、野原の二字にて、のらと讀むべきものか)のび 延伸(名)「のぶること。延長 伸長。長。たけ。勞れ又倦みたる時、手足を伸べて、深く呼吸すること。四がたう(強盜)の隠語。のびやく(延尺)の略」

のび 野火(名)「野燒」の火。野火(ひ)。古今物語思ひける頃物(まかりける道に、野火の燃えけるを見てよめる)のびあがり 伸上・延上(名)のびあがること。

のびあがる 伸上る・延上る(動四自) 足をつまでて、脊を高く伸ばす。のしあがる。大鎌「多かりし人の上より、伸び上り、見奉りて」 太平記 鎧鎧張り、つと延び上り」

のびあひ 伸足(名) 前方へ伸ぶる足。 鶴聲 本語「百足」の足取(ひ)足づかひ、引足(ひ)五尺、伸足五尺」
 のびえ 野稗・稗(名)「植」禾本科に屬する一年生の草。各地の原野の水邊に自生し、高さ一二尺乃至三四尺に達す。葉は、細長くして尖り、初夏の頃、緑色又は褐色の芒を具ふる小穗狀の花、相集まりて、普通、葉は甚だ小。實も、普通のより小く、葉と共に家畜の飼料とす。いぬびえ。くさびえ。みつびえ。

のびき 野引(名) 屋外にて客引(きき)をする事、又その人。
 のびく 伸句(名)「文」連句の句の、音調

のび

の伸びてゆるやかなるもの。 堅く引詰りたる句、即ち縮句(ひ)の後に附けて、變化の妙あらしむ

のびしやく 延尺(名) 圓の直径に對する圓周、又、直角三角形の邊(ひ)に對する弦(ひ)などの長さ。圓の直径に圓周率を乗ずれば、圓周の延尺となり、勾配の延長は、直角三角形の弦が邊に越ゆる長さなる類。のび。
 のびすぐ 延過ぐ・伸過ぐ(動上二自) 度延過ぎた舌(舌) 出過ぎたる言、又は、高慢の言など吐くことの形容。舌なが。川中島合戦「も一度言へ。延び過ぎた舌の根切り下げん」

のびずばん 濃昆敦般(西 Nueva España (新伊波波爾)の訛)「名」[地]メキシコの、西班牙の植民地なりし時代の稱。
 のびたき 野鴉(名)「動」鳴禽類に屬する鳥。形は鴉に等しく、羽色は、冬は頭より背部にかけて、末端鈍赤、根部黒色に、腰部は末端鈍赤、根部白色、下面、上喉は淡褐色にして、毎羽の根部は黒く、下喉より胸・腹に互りて淡褐色、尾下に至りて淡く、翼に白紋あり、翼と尾とは、黒くして、多少褐色に縁取りあり。夏は、羽毛の末端摩耗し去りて、腰部は白色に、その他は黒色に變じ、下面も、喉は多少黒色を露出し、それより下は、褐色を存すれど、腹部に至るに従ひて淡くなる。夏季は山地に住み、秋より平野に來る。こあがり。



(き た び の)

のびちぢみ 伸縮(名) 伸ぶること、縮むこと。或は伸び、或は縮むこと。伸縮(しんしゆく)。卷舒。
 のびと延斗(名)「建」平面矩形なる斗。専ら隅肘木(すみで)を承けしむるに用ふ。
 のびとめ 野大止(名)「地」武藏國北足立(きただち)郡大和田町の大字。野火止塚とて、在原業平の古蹟と稱する所あれど、伊勢

物語の「武藏野は今日はな焼きて云云」の歌によりて、附會せしなるべしといふ。
 のびとめ 野火止塚(名) 前條を見よ。 舊國雜記「このあたりに、野火止といへる塚ありけり。今日はな焼きそと詠ぜしによりて、烽火、忽に焼けとまりけるとなん。それより、この塚を野火止と名づけはべる由、人の申しはべりければ」
 のひにん 野非人(名) 非人頭の監督に屬せざる非人。

のび

のびねちどり 延根千鳥(名)「植」蘭科に屬する多年生の草。高さ七寸乃至一尺ほどに達し、葉は長筒圓形にして、鋭頭と波狀の葉縁とを具ふ。五六月の頃、莖頂の葉腋に、褐色の不整齊花、穗狀花序をなして開く。我國、各地に産し、殊に北地の高山に多く、又、觀賞用として栽培せらる。

のびのび 延延(名) 物事の、次第に長引くこと。延引に延引を重ねること。
 のびのび 伸伸(名)「貌」 滯る所なく生ひ伸びてあるさま。のびやか。のびらかに。落蓬「手足あはせていとよくのびのびして、辛うじて起き出で、手洗ひ居たり」 くらぎたるさま。のびやか。のびらかに。のんびり。ゆるやか。「のびのびした文字」 目急がぬさま。ぐづぐづ。悠悠緩緩。竹野「のびのびの御心なるべしと思ひつる」 「に同じ」

のびやか 伸やか「貌」のびらかに(伸らかに)のびゆ 野苺(名)「植」のびえ 野稗(名)に同じ。のびら 伸ら「貌」伸びてあるさま。のびのび。のびやか。源氏御覧「あましまし高うのびらかに、先の方、少し垂りて」 くらぎたるさま。のびのび。のびやか。ゆるやか。源氏「人の心も、のびらかにぞ見ゆるかし」

のびる 野蒜・山蒜(名)「植」百合(ひよこ)科に屬する多年生の草。葉は地下の鱗莖より發生し、細長くして、平行脈を有し、花莖は葉間より抽出し、高さ一二尺に達

し、夏季、その頂に、白色の小花、繖形花序をなして開く。葉と鱗莖とを食用に供す。各地の山野に自生す。ぬびる。「を見よ」のびるうんか 野蒜運河(名)「(地)次條のびるかう 野蒜運河(名)「(地)陸前國桃生(今)郡鳴瀬川の河口にある港。石港(今)を西に距る三里。兩港の間に、明治十四年の開鑿に係る運河ありて、長さ五里、野蒜運河といひ、又、東方、東名(今)に至り、松島に通ずるものを、東名運河といふ。

のふ(名)「なは(繩)の託。「のふを延(へ)る」長き繩に、數十の枝繩を附け、その端に釣針を附け、海に流して、魚を釣るもの。「播磨國の漁人の方言」のふ納納(名)「のふき(納袈裟)に同じ。和名納、能不」納の袈裟(名)「(句)前條に同じ。甚厚なけるもの。隨身の長(今)の狩衣、のふのけき」

のふ延ぶ伸ぶ(動上二自)「のほる(上る)を見よ」長く、高く、又は廣くなる。寸法距離又は面積、多くなる。「舒ぶ」のびのびになる。ゆるやかなる。くつろぐ。「暢ぶ」源氏「空もうららかにて、人の心ものび、物おもしろき折なるに」ゆたかなる。盛大になる。發展す。「身代延ぶ」時間又は時日、多くなる。久しくなる。永久に渉る。のびはる。源氏「老も忘れ、齡延ぶる心地して」時間、時日おくる。遅くなる。長びく。延引す。遅延す。玉葉「紅葉御覽せらるべしとて侍りける日、さしあふ事侍りて、延びにければ」おひたつ。生長す。落く。落解す。稀釋す。「膠延ぶ」遠く逃げゆく。にげのふ。おちのふ。宇崎三町ばかり走りのびて。著聞「いかにも延ぶべくもおぼえぬぞ。ただ早く首を切れ」延びた顔附(名)「(句)女に心を奪はれてある顔つき。女殺油地獄「妾が心は誓文からちやと、ひたり抱き寄せ、しみじみささやく。色こそ見えね河與(今)が悦、泰いと、伸びた顔附」蕎麥(今)が延びる(句)蕎麥切(今)。

製造後、多くの時間を過ぎたために、脆くなる。のぶ延ぶ伸ぶ(動下二他)「長く、高く、又は廣くす。寸法距離又は面積を多くす。のばす。「舒ぶ」東晋「若君の物を引き延ぶるやうに美しうなりまじりたまふを」攝白拍子亦赤葉をのべてやり」のびのびとなるやうにす。ゆるやかにす。くつろがしむ。源氏「位をも返し奉りて侍るに、私さまには、腰のてて」時間又は時日を多くす。久しくす。永久に渉らしむ。のばふ。源氏「齡をも延べんとおぼして」時間又は時日をおくれしむ。長びかしむ。延引せしむ。遅延せしむ。のばす。源氏「御修法」延べさせたまへば、とみにも、え歸り入らて」のびまげて敷く。「展ぶ」「寢床」のふをのふ水などを加へて、薄くす。溶かす。稀釋す。のばす。のぶ述ぶ陳ぶ(動下二他)「前條の語の轉義。心中に在る思を、外部に延べあらはす意」書業に出す。語る。告ぐ。説く。言ふ。思ふ所を、文章に記しつらねて、書物とする撰述す。著述す。述作す。名義抄「撰、ノブ・ユラブ」のふうず野ふうず(名)「次條を見よ。のふうぞく野風俗(名)「(野)は接頭語」いやし風俗。粗野なる風俗。諺「野風俗は、風俗のいやしきことなりと云ふ。うずといふは誤なり」に同じ。のふえ納衣納衣(名)「のふき(納袈裟)のふか 籠深(名)射たる矢の籠の、深く入るさま。「籠中の責む」参照。平曲「膝の口を、籠深に射させて」のぶき野路和尙菜(名)「(植)菊科に屬する多年生の草。葉は根生し、腎臓形にして、やや露(今)に似たり。花茎は、高さ約一尺に達し、小なる數箇の葉互生し、莖葉共に白色を帯びたるさま、牛蒡(今)のごとく、夏季、その頂に、白色の花、繖形花序をなして開く。各地の山間の陰地に自生す。ざせんさう。

のぶきり鋸(名)「のほきり(鋸)を見よ」のこぎり(鋸)を云ふ。「安房國・上總國邊の方言」のふく野服(名)「昔、遠行旅行などの時に著せし衣服。即ち野袴・春割羽織の類。

のふけさ納袈裟納袈裟(名)「納は納にて、人の棄てて顧みざる賤物を拾ひ取りて、補納して作るよりいふ袈裟の七條以上なるもの一種。諸種の色の布帛をまじへて縫ひたるもの。もと用ひ古したる布帛を集めて作るをいへるなれば、最も賤きものなれども、頭陀行(今)を修する高徳の比丘(今)の法衣なるゆゑ、却りて最も貴き物として、重き法會に、上臈の僧の著用する所となり、遂には、金襴を雜裁し、或は、雉色の布帛を、山形に縫ひつゝ、に至りて、遠山(今)袈裟の名も生じ、又、常の七條に、四天(今)の飾の小切を別色のものとして、これに擬したるもあり。納(今)の袈裟。納衣(今)の納(今)。養婦衣(今)のひらけさ(平袈裟)参照。のふひ納子(名)「のふう(納僧)に同じ。のふひ野伏(名)「山野に露宿して、佛道を修行する人。やまふし。拾遺「佛名(今)の野ふしにて、まかり出て侍る年」南北朝戰國の頃、山野に潛伏し居て、落武者を強迫して、甲冑などを剥ぎ取るを常習とせし土民。のふせり。「野臥・野武士」梅松論「かかる處に、守山(今)邊より、野伏ども、山野に走せ散りて、敗軍を追ひ詰める程に」太平記「吉野十津川、宇多内郡の野伏も、大塔宮の命を含んで、相集るもの七千餘人」のふひくさ野伏軍野臥軍野武士軍(名)「野伏」の多く集まりてする、紀律の立たぬ戰。太平記「野伏軍ばかりしつる事のふかしさ」のふひくさ野節黒(名)「(植)ふし(今)のふしどなへ野伏備野臥備野武士軍(名)「野伏」の、多くの寄り合ひて控へたる陣。

のふしゆ納衆(名)「納衣(今)を著けたる僧衆。のぶすま野模(名)「ふきながし(吹流)に同じ。のぶすま野食(名)「叩きて軽く煮たる小鳥の肉と叩きて湯を掛けたる鯛の肉と、薄くへぎて軽く茹きて、袋の如くなりたる鮑とを煮汁に入れて煮きあはせ鯛と鳥との肉が鮑の袋の中に包まるやうにしたる食品。動もあな(鼯鼠)を云ふ。「野伏間」「機内の方言」のふせ野布施(名)「野は野天(今)の義」喪場にて分ち與ふる施物。はなせん。のふせり野伏臥(名)「(野)のふし(野伏)に同じ。やまだち。山城。山野に露宿する乞食。佛語「野天」野ふせりの枕に裂くる米かな」世間手代氣氣すかし見れば、疵かぶりなり。おのれ、野ふせりの分(今)て、地の穢穿鑿」のふそ納僧納僧(名)「納袈裟(今)を著くること、禪僧に殊に多きよりいふ。ぜんそ(禪僧)に同じ。のふた野豚(名)「(動)野生のぶた。野猪(今)ほどには猛からぬもの。のぶたう野葡萄蛇葡萄(名)「(植)葡萄科に屬する多年生の草。莖葉を有し、卷鬚に依りて、他物に攀緣す。葉は卵形にして、淺く三乃至五片に裂けて、掌状をなし、鋸齒あり、葉柄長くして、互生し、表面には、黄褐色の綿毛あり。夏季、綠黄色の五瓣花、短き複總狀花序をなして開き、果實は、球形の漿果にして、紅白・紫黒の諸色相雜りて美しけれど、食ふに堪へず。ねこのめ。

のぶち野縁(名)「(建)「(野)は接頭語」隠れたる位置に取附けたる、細長き木。のぶち野扶持(名)「江戸時代に、鳥見(今)などの小吏に給せし扶持。のぶち「名」のはうつ(野方圖)に同じ。のぶち野太し(形)「(野)は接頭語」つぎ(圖太し)に同じ。薩摩歌「人の目を暗ますは人買よりものぶとい奴の」夕霧阿波の鳴瀬竹を呼び出してくれとは、のぶとい者だ」「信友」を見よ。のぶとも信友(名)「人」はんのおとも(伴

る僧衆。のぶすま野模(名)「ふきながし(吹流)に同じ。のぶすま野食(名)「叩きて軽く煮たる小鳥の肉と叩きて湯を掛けたる鯛の肉と、薄くへぎて軽く茹きて、袋の如くなりたる鮑とを煮汁に入れて煮きあはせ鯛と鳥との肉が鮑の袋の中に包まるやうにしたる食品。動もあな(鼯鼠)を云ふ。「野伏間」「機内の方言」のふせ野布施(名)「野は野天(今)の義」喪場にて分ち與ふる施物。はなせん。のふせり野伏臥(名)「(野)のふし(野伏)に同じ。やまだち。山城。山野に露宿する乞食。佛語「野天」野ふせりの枕に裂くる米かな」世間手代氣氣すかし見れば、疵かぶりなり。おのれ、野ふせりの分(今)て、地の穢穿鑿」のふそ納僧納僧(名)「納袈裟(今)を著くること、禪僧に殊に多きよりいふ。ぜんそ(禪僧)に同じ。のふた野豚(名)「(動)野生のぶた。野猪(今)ほどには猛からぬもの。のぶたう野葡萄蛇葡萄(名)「(植)葡萄科に屬する多年生の草。莖葉を有し、卷鬚に依りて、他物に攀緣す。葉は卵形にして、淺く三乃至五片に裂けて、掌状をなし、鋸齒あり、葉柄長くして、互生し、表面には、黄褐色の綿毛あり。夏季、綠黄色の五瓣花、短き複總狀花序をなして開き、果實は、球形の漿果にして、紅白・紫黒の諸色相雜りて美しけれど、食ふに堪へず。ねこのめ。

のぶち野縁(名)「(建)「(野)は接頭語」隠れたる位置に取附けたる、細長き木。のぶち野扶持(名)「江戸時代に、鳥見(今)などの小吏に給せし扶持。のぶち「名」のはうつ(野方圖)に同じ。のぶち野太し(形)「(野)は接頭語」つぎ(圖太し)に同じ。薩摩歌「人の目を暗ますは人買よりものぶとい奴の」夕霧阿波の鳴瀬竹を呼び出してくれとは、のぶとい者だ」「信友」を見よ。のぶとも信友(名)「人」はんのおとも(伴

のぶなが

信長を見よ。
信長の四天王「句」「人」織田信長

の部將中、最もすぐれたる四人、即ち
柴田勝家・瀧川一益・丹羽・長
秀明智光秀。

のぶのき 化香樹兜櫛樹「名」「植」の
る(野胡桃)に同じ。

のぶさ 延房「名」「人」いちもんじのぶさ
(「文字延房」を見よ)

のぶさ 信房「名」「人」びざんのぶさ(備
前信房)を見よ。

のぶみ 野文「名」「野」野送(の)の義な
るべし。江戸時代に、極めて貧しき者の

葬式に檀那寺の僧侶の列席して、引導を
渡す手数を避け、その代りに交付せし文

書。幕府は、定式に違背せりとして、禁令
を發した。

のぶる 野風呂「名」「野」天(の)に風呂を
立てて入ること、又その風呂。

のぶる 野風爐「名」「野」掛(の)などの
時、携へ行くに便利なるやうに造りたる、

茶の湯の風爐。

のべ 延「名」「延」延ぶること、又その物。
『のべがみ(延紙)の略。一代女、延の鼻紙』

『根柢心中』膝にもたれて、さめざめと、涙
は延を流しけり。『のべうち(延打)の略。

『伸』『のべきせる(延煙管)の略。伸』『
多くの者の協力して、一つの仕事を、若干

の日の間に爲す時、假に、一人にて爲し
たるものとして、その日数を換算し、又は

一日に爲し終へたるものとして、その人
数を換算すること。前者を延日数の(の)後

者を延人員(の)といふ。『胸下駄の
背面を、凹に彫ること、又その造り方の胸

下駄。『のべ(延坪)の略。』『(商)の
べざりひき(延取引)の略。

延の假名(延取引)「句」「女房」を「によ
うばう」牡丹を「ばうたん」詩歌を「し
いか」といふが如く、音を延ばして言ふ
こと。

のぶ

じ。井筒義平河内通「野邊のおくりの門
火焚く」

野邊の煙「句」火葬の煙、茶屋(の)の
煙。新古今、あはれ君いかなる野邊のけ

ぶりにて空しき空の雲となりけん」
野邊の供「句」葬送の列に加はるこ

と。『實古歌集七巻』類類下人隣家の人
人、志ある野邊の供」

野邊の錦「句」野邊に色色の草花の美
しく咲きたるを、錦に譬へていふ語。

『一、枝の花の句もあるものを野邊の
錦を思ひやらなん」

野邊の縁「句」野邊の草木の縁
の色。古今、わがせこが衣はるさめ降る

ことに野邊の縁ぞ色まさりける」
野邊へ送る「句」遺骸を、埋葬地まで

見送る。『のべ(野邊送)参照。五人女
瓶に入れて、萌え出る草の片陰に埋め

ける」

のべうち 延打伸打「名」金屬を鍛ひて、
延べ平めて造ること、又その造り方の物。

仕懸文庫、小柄(の)は、駿河の延打の物。
のべうり 延賣「名」「商」延取引の契

約にて賣ること。『延賣に對して』『徳川
時代にて、當年上納すべき年貢を、規定に

従ひ、來年の秋に至りて、金納とせしこと。
のべおくり 野邊送「名」「野邊へ送る」

を見よ。遺骸を、埋葬地まで送ること。
のおくり。のべのおくり。葬送。會葬。日蓮

上人御法海、佛壇(の)上げ、稱名唱へ
て野邊送」

のべががみ 延鏡「名」その物を、直接に
見ず、鏡にうつし取りて見ること。假令

本忠臣蔵、由良之助、釣燈籠の灯(の)を照
し、讀む長文(の)は、御臺(の)より……、

お輕は、上より見おるせど、夜眼(の)・遠眼
(の)なり、字性(の)も臆思ひつきたる延

鏡、出して、寫して讀み取る文章」
のべがく 延樂「名」拍子を延ばして長

のべ

平めたる金屬。のしきん延金参照。『だ
ろけん(刀劍)の異稱。

のべかひ 延買「名」「商」延取引の契約
にて買ふこと。『延賣に對して』

のべがみ 延紙「名」竪七寸、横九寸ほど
なる、小形の杉原紙。鼻紙などに用ふ。こ

すぎ。のべ。若風俗「延紙にて、若衆千體、
張貫(の)に拵へ」

のべきせる 延煙管伸煙管「名」全部、
金屬にて製し、羅字(の)竹を用ひぬ煙管。

延打(の)の煙管。
のべきん 延銀伸銀「名」器物に造るた

めに、銀を引延ばすこと、又その引延ば
したる黄金。

のべくら 延銀伸銀「名」器物に造るた
めに、銀を引延ばすこと、又その引延ば

したる銀。

のべくら 延銀伸銀「名」器物に造るた
めに、銀を引延ばすこと、又その引延ば

したる銀。

のべくら 延銀伸銀「名」器物に造るた
めに、銀を引延ばすこと、又その引延ば

したる銀。

のべくら 延銀伸銀「名」器物に造るた
めに、銀を引延ばすこと、又その引延ば

したる銀。

のべくら 延銀伸銀「名」器物に造るた
めに、銀を引延ばすこと、又その引延ば

したる銀。

のべくら 延銀伸銀「名」器物に造るた
めに、銀を引延ばすこと、又その引延ば

したる銀。

のべくら 延銀伸銀「名」器物に造るた
めに、銀を引延ばすこと、又その引延ば

のべ

わた(延眞綿)参照。
のべだか 延高「名」江戸時代に、物成(の)

じの低き地より、高き地に知行所を移し
し時の、餘分となりたる高。

のべたら 延「名」たえまなく單調に續くさ
ま。だらだら。のべつ。のべくら。

のへち 野邊地「名」「地」陸奥國上北(の)
郡にある町。野邊地灣頭に位す。海陸交

通の便に富む。
のべちぢめ 延縮伸縮「名」或は伸べ、

或は縮むこと。伸縮(の)し。屈伸。『
のべちぢめ(延縮)に同じ。』

のへぢわん 野邊地灣「名」「地」陸奥國
にある灣。陸奥灣の一部。夏泊(の)半島

によりて、東方の青森灣と分る。その北隅
に、別小灣をなすを、大湊灣といふ。

のべつ 延「名」たえまなく單調に續くさ
ま。だらだら。のべつ。のべくら。

のべつ 延「名」たえまなく單調に續くさ
ま。だらだら。のべつ。のべくら。

のべつ 延「名」たえまなく單調に續くさ
ま。だらだら。のべつ。のべくら。

のべつ 延「名」たえまなく單調に續くさ
ま。だらだら。のべつ。のべくら。

のべつ 延「名」たえまなく單調に續くさ
ま。だらだら。のべつ。のべくら。

のべつ 延「名」たえまなく單調に續くさ
ま。だらだら。のべつ。のべくら。

のべつ 延「名」たえまなく單調に續くさ
ま。だらだら。のべつ。のべくら。

のべつ 延「名」たえまなく單調に續くさ
ま。だらだら。のべつ。のべくら。

のべつ 延「名」たえまなく單調に續くさ
ま。だらだら。のべつ。のべくら。

のべつ 延「名」たえまなく單調に續くさ
ま。だらだら。のべつ。のべくら。

のべつ 延「名」たえまなく單調に續くさ
ま。だらだら。のべつ。のべくら。

のべつ 延「名」たえまなく單調に續くさ
ま。だらだら。のべつ。のべくら。

のべーばら 延拂【名】「商」英 Deferred payment 商品の引渡を受けた後、その代金を、或期間の後に至りて支拂ふこと。かけはらひ。現金拂に對して。

のべーほう 延棒・伸棒【名】延ばして長くしたる金屬の棒。同じ。

のべまい 延米【名】でめまい(出目米)にのべまわした延真綿【名】江戸時代に、眞綿を年貢として輸納するに、通常の一倍入の分量以上に増して入れしこと。のべだつ(延大豆)参照。

のべもの 延物【名】のべがく(延樂)に同じ。(早物)に對して。

のべるじやう ノベル賞(英 Nobel prize)【名】瑞典人ノベル(Nobel)の、ダイナマイトその他の發明により得たる財産の大部分を、遺言して設定せしめたる獎勵金。毎年、の利子を、その年内に於ける物理化學生物醫學に關する重要な發明發見文學上の理想主義的傾向の傑作、世界人類の平和に貢獻多き事業の功績者に對し、各約八千磅を、表彰金として贈與す。のべる賞金。

のべるじやうさん ノベル賞金【名】前のべるじやう ノベル油(英 Nobel's oil)【名】「化」にあらはるんに同じ。

のべわけ 延分【名】金・銀などを分けて鍛ひ、延べ平めて飾とすること、又その造り方の品。若鳳凰・金銀延分の筈。

のべわたり 延渡【名】「商」英 Forward delivery 又 P.ump 賣買契約をなしたる商品の受渡を、契約成立の日より起算して、一定の期日後に延ばすこと。(定期後向)渡到著後に對して。

のべをか 延岡【名】「地」日向國東臼杵(延岡)郡にある町。北川・祝子の川五箇瀬(延岡)川の會流點に位し、一港灣を成す。鐵道の設なれど、海陸交通の便に富む。内藤氏の舊藩地。舊稱、縣(延岡)。明治の初年設置の縣の一。みみつ(美津津)参照。

のべをかじやう 延岡城【名】日向國東臼杵(延岡)郡延岡町にありし城。初縣の

莊司土持氏、これに據りしが、大友氏に亡され、更に島津氏の有に歸し、豊臣秀吉、島津氏を降すや、高橋元種に與へ、元種、罪を徳川氏に得て除かれ、後、有馬三浦牧野の三氏相尋いて來り治め、延享四年以來、内藤氏の居城となりて、明治維新に及ぶ。

のぼきり 鋸【名】「のぼきり(鋸)を見よ」のぼきり(鋸)に同じ。「古語」字彙「鋸、乃保支利」。

のぼきりば 鋸齒【名】のこぎりの齒。「古語」名義抄「鋸牙、ノボギリバ」。

のぼけ 野木瓜【名】「種」ききげ(樺子)にのぼけ 野架【名】さほ(外架)に同じ。

のぼし 野星【名】「種」ほし(星)に同じ。

のぼす 上す【動四他】「次條の訛。狂言『役』御布施……それは、はや持たしてのぼしました」。

のぼす 上す【動二他】「のぼらしむ。上へ進ましむ。上ぐ。(下すに對して) 然「高き木にのぼせて」上流の方へ進ましむ。さかのぼらす。(下すに對して) 萬葉百「足らずいかに造りのぼすらむ」。

のぼす 貴き處【名】「地」又は來らしむ。地方より京へ進み、又は來らしむ。(下すに對して) 姓「下」なるをも呼ぶのぼせ(沙石集「田舎よりも、國の物をのぼせ、京よりも、色色の物下しなどして」)。

のぼす 逆上す【動二自】「或病の一症候として、頭部に充血し、苦惱耳鳴頭痛などを起し、或は躁狂狀の發作(癡)を呈す。かみつる。上氣す。逆上(癡)す。感情激昂して、前後のわきまへを失ふ。迷ふ。とのぼす。逆上(癡)す。前後のわきまへを失ふ程に、一つの物事に、心を集む。夢中になる。こりかたまる。熱中す。のぼる。

のぼせ 逆上【名】「のぼること。ぎやくじやう。ちのぼせ。のぼりき。上氣。逆上引下(癡)【句】逆上を直すこと。「のぼせ引下の藥」。

のぼせ あがる 逆上【動四自】「のぼす逆上す」を強めていふ語。

のぼせに 上荷【名】地方より京の方へ送り送る荷物。伊勢屋「京阪までものぼせ荷の」。

のぼせひきさげ ぐすり 逆上引下藥【名】逆上を治療する藥。ひきさげぐすり。

のぼせめ 逆上眼【名】逆上のために起る眼病。伊勢屋新選集「のぼせ目の免を放せ夢の園」。

のぼたん 野牡丹【名】「種」野牡丹科に屬する常綠灌木。葉は卵形又は短き披針形にして、長さ一二寸、鋭頂、全緣、莖にも、葉にも、茶褐色の毛茸を有す。夏、梢頭の葉腋に、帯紅淡紫色にして、直徑二三寸なる五瓣の美花を開く。觀賞用として栽培すれど、冬季は温室に入れおくを要す。やばたん。

のぼたん 野牡丹科【名】「種」顯花植物被子類、雙子葉門、繡瓣花區の一科。草本、灌木又は稀に喬木。殊に熱帶地方に多く分布し、美花を生ずるもの多し。野牡丹はしかん等、これに屬す。

のぼたけ 野佛【名】野中にある佛。伊勢屋新選集本「野佛のによりりと高き冬野かな」。

のぼの 能褒野【名】「地」伊勢國にありて日本武尊の蝦夷を平げて、神宮に復奏せんとする途中、薨去ありて埋葬せられ給ひし處。今の鈴鹿(延岡)郡川崎村宇田村の古墳を、その御墓に據す。龜山(延岡)の古墳の中間、街道の北なり。尊をここに葬るや、白鳥あり、飛びて、大和國琴原(延岡)に到り、又、河内國の古市に到れりとの傳説ありて、兩地に御墓あれど、延喜式には、この地の御墓の御を擧げたり。

のぼはん 貌【名】「次條に同じ。

のぼん 貌【名】「次條に同じ。

のぼり 上登昇【名】「のぼること。あがること。(下)に對して」。

のぼり 坂路【名】「のぼること。あがること。下(下)に對して」。

のぼり 登り【名】「のぼること。あがること。下(下)に對して」。

のぼり 登り【名】「のぼること。あがること。下(下)に對して」。

のぼり 登り【名】「のぼること。あがること。下(下)に對して」。

のぼり 登り【名】「のぼること。あがること。下(下)に對して」。

のぼり 登り【名】「のぼること。あがること。下(下)に對して」。

のぼり 登り【名】「のぼること。あがること。下(下)に對して」。

のぼり 登り【名】「のぼること。あがること。下(下)に對して」。

のぼりが

の傾斜に沿ひて、少きは三室、多きは二十餘室を前後連接して、階段狀に築き、各室の前壁の脚部に、火床を設け、下方より漸次に上方へ燒き上ぐる方式のもの。古來、我國に廣く行はれ、燃料は松薪を用ふ。

のぼりがめ 上龜 [名]

紋所の一。のぼりかめ

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]

のぼりかめ 上龜 [名]



(めがりぼの)

のぼり

へ登るために設けたる、傾斜せる道。

のぼり 登る 幟 [名] 短冊形の幟の下

に括弧()を附け、風の強弱によりて、

その猿の自然に竿を上下するやうにせる

玩具。もと五月幟の下に、括弧を飾るこ

とありしに象()る。 「る竿」

のぼり 登る 幟 [名] 幟を附けて立つ

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり 登る 幟 [名] 船の荷替()

のぼり

なるもの。のぼりばし。

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり 登る 幟 [名] 前條に同

のぼり

「曹司におりたまへれば、例のこの御曹司

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

のぼりには、人の見るを知らずのぼり

神輿を奉じ、武具祭器をも列ねて、同郡
原町(原)まで、五里の間を進み、翌十二
日、太田・小高兩社の神輿も加はり、騎士
の数も數百に及び、祭場なる同町雲雀原
(雲雀)に赴き、式を擧ぐ。徳川時代には、五
月中の申の日に、行ひ、もと藩主相馬氏の、
下總國小金原(小金)にて舉行し、幕府の嫌
忌を避けたために、祭祀に託し、振武の
旨に基づけるもの。廢藩後一旦廢絶した
れども、明治十一年頃より再興せり。こ
まとり。野馬追祭。
のまおひまつり 野馬追祭(名) 前條に
のまかた 野馬方(名) 徳川幕府の職制
の。一。既方に屬せしもの。定員二人。寛
政五年に設置す。
のまかたあらためやく 野馬方改役(名)
徳川幕府の職制の一。既方に屬す。定員
一人。寛政五年に設置す。
のまかたかきやく 野馬方書役(名) 徳
川幕府の職制の一。既方の書記。定員四
人。寛政五年に設置す。
のまき 館巻(名) くつまき(香巻) 同
じ。義經記「まきよりかみ十四束に、た
ぶたぶと切りたるを」。「ふ所」。
のまき 野牧(名) 野外の、牛馬を放ち飼
のまき 祈まく(動他) 祈(む)ことは。祈
(る)には。「古語」 萬葉たむけの神に幣
(ま)まつり吾(こ)が乞ひのまく」。
のまき せんげん 野間權現(名) 薩摩國野
間岬に祀る神。唐土の姥媽神の飛來せ
るにて、舟の守護神といふ。
のまき 宛廻(名) 宛の周圍。宛の太
さ。曾我實山「時政は、隠なき大力、宛廻
太く、矢束(や)も拔群」。
のまき 野馬奉行(名) 徳川幕府
の職制の一。下總國小金(小金)の御殿の長。
綿貫(綿貫)氏の世職。
のまき 野間岬(名) 「地」 薩摩國川邊
(川邊)郡にある岬。野間半島の西端。神代
の笠沙(笠沙)の岬は、この地なりといふ。
のまき 野豆鹿番(名) 「植」 つるまめ蔓
豆)に同じ。「見よ」。
のまき 吞まる(句) のむ(吞む)の條下を

のまき 野苧麻(名) 「植」 苧麻(苧)の一
品種。おにやぶまを。
のまき 又 木材に孔を穿ち、溝を掘り、
又は鉋の適用に困難なる場所を削る等に
用ふる具。柄あり、槌にて、その柄の頭を
打ちて用ふ。種類多し。和名、鑿、能美」。
のまき 言はば槌(句) 次條の略。「諺語」
鑿と言はば槌も出せ(句) 何事にも
機軸を要する譬。「諺語」
鑿と言へば槌(句) 次條の略。「諺語」
鑿と言へば槌を出す(句) 機軸に立
ちたらく形容。「諺語」
のまき 船茹細衣細柳(名) まいばだ(横皮)
に同じ。太平記「矢口の渡の船の底を、二
所鎗(こり)ぬきて、細をさし」。
のまき 飲(口) 呑(口) 飲むこと。田のみの
ぐち(飲口)の略。「のみ」の善い煙草」田のみの
人が、客より賣買の註文を受けて、證據金
及び取引所の手数料を預りながら、その
賣買を市場にかけず、客に對しては、取引
したるが如くに装ひ、自らその相手方と
なり、市場の出來直によりて、損益を計算
するか、又は他に反對の註文ありたる時、
これと喰ひ合はせて、口錢の外に、取引所
の手数料をも、自己の所得とすること。丸
呑半差(丸呑)三分差(三分)などの種類あ
る。のま(呑屋)參照。
のま 祈(名) 祈(む)こと。いのり。「古
語」 記能美(記)の御常物(御)を獻る」
のみ 蚤(名) 「動」 有吻類に屬する昆蟲。
體は側扁にして、大さ一分を越えず、脚は
六本ありて、よく發達し、殊に、後の一對
は、強大にて、跳躍に適し、口器は刺蝟吸
収に適す。雌は雄に比して大く、常に人
家に棲息し、人血を吸收す。又、犬猫等に
寄生する種類もあり。
のま 蚤にも喰はさぬ(句) 大切にす。愛護
す。舊所載「娘よ父よと名告合(告)す
るそれまでは、蚤にもくはさぬ大事の
娘」。「條に同じ。諺語」
蚤の息(息) さへ天に上(上)る(句) 次
蚤の息(息) も天(句) 次條の略。「諺語」

荒御新内神徳「下世話に申す、蚤の息も
天とやら」。
蚤の息(息) も、天に上(上)る(句) 「源
平盛衰記の卷四十五なる大地震の條に
「蚤(の)の息、天に上る」とある「蚤」の字
を「のみ」と傍訓せし書あるより誤れる
ものといふ。「農民の息が天に上る」參
照」。「蝦蟇(の)の息、天に上る」に同じ。
「諺語」 油漬(油)及ばぬ戀をするぞをかし
き(さ)いふ句に、蚤の息も天に上ると打
嘆き」。
蚤の皮を剥ぐ(句) 些細なる物事に
對してのみ心を勞する譬。「諺語」
蚤の華丸百分の一(句) 極めて小き
物の譬。「諺語」
蚤の五月、蚊の六月(句) 蚤は、五月
雨(雨)頃の濕潤の季節に多く、蚊は、日
照りて、乾燥する季節に多き形容。「信
濃國の諺語」
蚤の夫婦(句) 女は肥大、男は矮小な
夫婦の形容。「諺語」
蚤の眼(眼) に、蚊の睫(睫) (句) 極め
て微小なる物の譬。「諺語」
蚤の夜詰(夜詰) 蠅の朝起(朝起) (句) 蚤は終
夜、蠅は朝よりあらはれて、人を惱ま
す。「諺語」
蚤も殺さず(句) 「蟲も殺さず」に同
じ。「諺語」
のま 能美(名) 「地」 加賀國の四郡の一。
郡役所を小松町に置く。
のみ 助(名) その物事一つにて、他には無
き意。ばかり。漢文の訓讀にて、その
事を專とする意、又は決定の意。(文句の
末に用ふ)「而已耳、爾已」。
のみ あかす 飲明す 呑明す(動四他) 酒
を飲みながら、夜を明す。夜どほし酒を飲
む。(飲慕すに對して) 俳諧新選「長能」飲明
す年を忘れてよいものか」和合人「長き夜
すがら呑みあかしぬ」。
のみ あく 飲明く、呑明く(動二他) 悉
く飲みて、入物(物)を空にす。芭蕉「飲明
けて花いけにせん二升樽」。
のみ いれ 吞入(名) こひぐち(鯉口)に
同じ。第五大難紙「公方(公)様の御腰の物

は、鞘塗りおとし、……のみ入」
のみ うち 鑿打(名) 木彫をするに、最初、
平鑿又は圓鑿を、玄能にて打込みて、大體
を作ること。
のみ おほゆ 飲覺ゆ 呑覺ゆ(動二他) 飲
みて味の善惡を知る。のみわく。狂言樂
橋落「よう飲み覺えた、これは遠來ぢや」
のみ かく 飲掛く 呑掛く(動二他) 飲
みはじむ。ひっかく。若風(若風)浮舟(浮舟)
を仕立てて、新堀より乗り浮れて、……飲
み掛けて、川下に行くに」。「飲みて、中
途に止む。のみさす」。
のみ かく 飲隠 呑隠(名) 飲みて、飲
まぬふりを装ふこと。狂言「どぶかつちり」の
みかくしばかりさつしやる」。
のみ かけ 飲掛 呑掛(名) 飲みて、中途
に止むこと、又その後に残りたる物。のみ
さし。のみこのこし。のみこのこり。
のみ かた 鑿方(名) のみて鑿手(鑿手)を云ふ。
「陸奥國の方言」。
のみ かつ 飲潤す 呑潤す(動四他) の
みほす(飲乾す)に同じ。
のみ きり 鑿切(名) 石工の、石面を仕上
ぐるに、端の失れる鑿にて、平行に且つ斜
に溝の出るやうに缺き取ること。
のみ きる 飲切る 呑切る(動四他) 全部
を飲む。のみをはる。のみつくす。太蔵
「飲みきりし旅の日數や香燭散」
のみ ぐすり 飲藥(名) 飲用する藥劑。内
服藥。(單藥などに對して)
のみ ぐち 飲口 呑口(名) 飲みたる風
味。のみ。(主に、酒、烟草などにいふ) 田
酒を好みて飲むこと、又その人の。のみて。
田 盃の口に觸るる部分。八笑人「猪口(猪口)
の呑口を、丁寧に拭き、手に持ちて、暫く
座中を見廻し」。
のみ ぐち 飲口 呑口(名) 樽
の側面、底に近き部位に穿ちたる
穴に嵌入して、その中の酒、醬
油などを注ぎ出す管。平常は、
木栓にて止めおく。のみ。注口。
八笑人「素人(素人)が呑口抜くやう
に、大層びねるな」田 煙管(煙管)の吸口。
(ちぐみの)



「惡し」酒など飲みて、その代價を拂はずに逃げ去ること。

のみぬけ 飲拔呑拔「名」次條に同じ。

のみぬけじやう 飲拔上戸・呑拔上戸「名」そのぬけじやう(底拔上戸)に同じ。

のみね 盤根「名」鐵の一種。鑿の如き形せるもの。

のみのかし 飲殘・呑殘「名」飲みのかしこと、又、飲みのかしたる物。のみかけのみのかし。

のみのかす 飲殘す・呑殘す「動四他」飲みかして殘す。飲み盡さずに殘す。

のみのかり 飲殘・呑殘「名」飲みのかりこと、又、飲みのかりたる物。のみかけのみのかし。

のみのかる 飲殘る・呑殘る「動四自」飲み盡さずして、後に殘る。のみきらず。

のみのかすね 野見宿禰「名」(「人」出雲國の人。天穗日命の裔。臂力衆にすぐれ、勇を以て聞け。垂仁天皇の朝、勅命により、當麻蹶速(あまた)と力を争ひて、これを斃し、留りて朝廷に仕ふ。皇后日葉酢(ひはす)姫崩せし時、天皇、先に殉死を禁じ給ひしかば、填輪(みづ)の制を案出し、天皇の嘉納を得て、永制となり、姓を土部臣(つちべ)と賜はる。菅原氏大江氏は、その裔なり。

のみのかすま 雀舌草「名」(「植」のみのかすま(雀舌草)の略。

のみのかつ 石竹科に屬する一年生の草。莖は纖細にして、又狀に分岐して、叢生し、高さ二寸乃至一尺ほどに達す。葉は對生し、卵形にして、鋭頭を有し、葉柄無し。春夏の候、白色の小花、聚繖花序をなして開く。各地の原野に自生す。のみめ。すずめのあみ。

のみのかすま 雀舌草「名」(「植」石竹科に屬する草。莖は平滑にして、纖弱、高さ五七寸に達す。葉は對生し、長橢圓狀披針形にして、鋭頭をなし、往往にして、波狀縁を有し、葉柄を缺く。春夏の候、白色の小花、聚繖花序をなして開く。各地の原野に自生し、初生葉は、蝶でて食用に供す。こめな。のみのかすま。

のみのかすま 雀舌草「名」(「植」石竹科に屬する草。莖は平滑にして、纖弱、高さ五七寸に達す。葉は對生し、長橢圓狀披針形にして、鋭頭をなし、往往にして、波狀縁を有し、葉柄を缺く。春夏の候、白色の小花、聚繖花序をなして開く。各地の原野に自生し、初生葉は、蝶でて食用に供す。こめな。のみのかすま。

のみのかすま 雀舌草「名」(「植」石竹科に屬する草。莖は平滑にして、纖弱、高さ五七寸に達す。葉は對生し、長橢圓狀披針形にして、鋭頭をなし、往往にして、波狀縁を有し、葉柄を缺く。春夏の候、白色の小花、聚繖花序をなして開く。各地の原野に自生し、初生葉は、蝶でて食用に供す。こめな。のみのかすま。

のみのかすま 雀舌草「名」(「植」石竹科に屬する草。莖は平滑にして、纖弱、高さ五七寸に達す。葉は對生し、長橢圓狀披針形にして、鋭頭をなし、往往にして、波狀縁を有し、葉柄を缺く。春夏の候、白色の小花、聚繖花序をなして開く。各地の原野に自生し、初生葉は、蝶でて食用に供す。こめな。のみのかすま。

のみのかすま 雀舌草「名」(「植」石竹科に屬する草。莖は平滑にして、纖弱、高さ五七寸に達す。葉は對生し、長橢圓狀披針形にして、鋭頭をなし、往往にして、波狀縁を有し、葉柄を缺く。春夏の候、白色の小花、聚繖花序をなして開く。各地の原野に自生し、初生葉は、蝶でて食用に供す。こめな。のみのかすま。

のみのかすま 雀舌草「名」(「植」石竹科に屬する草。莖は平滑にして、纖弱、高さ五七寸に達す。葉は對生し、長橢圓狀披針形にして、鋭頭をなし、往往にして、波狀縁を有し、葉柄を缺く。春夏の候、白色の小花、聚繖花序をなして開く。各地の原野に自生し、初生葉は、蝶でて食用に供す。こめな。のみのかすま。

のみのかすま 雀舌草「名」(「植」石竹科に屬する草。莖は平滑にして、纖弱、高さ五七寸に達す。葉は對生し、長橢圓狀披針形にして、鋭頭をなし、往往にして、波狀縁を有し、葉柄を缺く。春夏の候、白色の小花、聚繖花序をなして開く。各地の原野に自生し、初生葉は、蝶でて食用に供す。こめな。のみのかすま。

のみのかすま 雀舌草「名」(「植」石竹科に屬する草。莖は平滑にして、纖弱、高さ五七寸に達す。葉は對生し、長橢圓狀披針形にして、鋭頭をなし、往往にして、波狀縁を有し、葉柄を缺く。春夏の候、白色の小花、聚繖花序をなして開く。各地の原野に自生し、初生葉は、蝶でて食用に供す。こめな。のみのかすま。

のみのかすま 雀舌草「名」(「植」石竹科に屬する草。莖は平滑にして、纖弱、高さ五七寸に達す。葉は對生し、長橢圓狀披針形にして、鋭頭をなし、往往にして、波狀縁を有し、葉柄を缺く。春夏の候、白色の小花、聚繖花序をなして開く。各地の原野に自生し、初生葉は、蝶でて食用に供す。こめな。のみのかすま。

のみのかすま 雀舌草「名」(「植」石竹科に屬する草。莖は平滑にして、纖弱、高さ五七寸に達す。葉は對生し、長橢圓狀披針形にして、鋭頭をなし、往往にして、波狀縁を有し、葉柄を缺く。春夏の候、白色の小花、聚繖花序をなして開く。各地の原野に自生し、初生葉は、蝶でて食用に供す。こめな。のみのかすま。

のみほす 飲乾す・呑乾す「動四他」盃の乾くほど飲みつくす。少しも殘さずに飲む。のみからす。和合人「酒」……慈と臨の方を向き、人に見えぬやうに呑みほして」

のみまほし 飲廻・呑廻「名」飲みまほすこと。まほしのみ。

のみまほす 飲廻す・呑廻す「動四他」一箇の茶碗又は杯に盛りたるものを、居並びたる人々、順次に一口づつ飲みて、隣席の者に渡す。

のみまほり 飲廻・呑廻「名」飲みまほるのみまほる飲廻る・呑廻る「動四他」多くの家を索めあるきて、酒を飲む。のみちらす。

のみみつ 飲水呑水「名」飲むべき料の水。飲料水。飲用水(使水)に對して「飲む」に同じ。

のみむじ 蚤蟲「名」(「動」さびむし(飛蟲)に同じ。

のみもの 飲物「名」飲むべき料の物。飲みのみ。飲屋「名」(「あさかや」居酒屋)に同じ。日れりや(料理屋)を云ふ。「關西の語」。

のみや 呑屋「名」(「商」のみ(呑)を爲すのみよけきく蚤除菊「名」(「植」ちよけきく(除蟲菊)に同じ。「粉」に同じ。

のみよけ 蚤除粉「名」のみよけきく(蚤除の粉)に同じ。

のみれう 飲料香料「名」飲むべき香料のもの。のみもの。飲料(「酒」煙草などの、自家用とする料。のみれう(飲代)に同じ。

のみわく 飲分く・呑分く「動二他」のみわく(飲覺ゆ)に同じ。一徳利又は一杯の酒を二人にて飲む。

のみをさむ 飲納む・呑納む「動二他」酒などを、その時を最後として飲む。

のみをさめ 飲納・呑納「名」飲みをさむこと。又その物。義士銘傳「酒に性根を奪はれ、……もはや、母人の御前で呑納に持参仕つた」

のみを飲む 飲む「動四他」口より入れ、喉を経て、胃に送る。「嘔む」。「嘔ます」に、胃へ送る。丸呑(「に」す。のみこむ。

のみを飲む 飲む「動四他」口より入れ、喉を経て、胃に送る。「嘔む」。「嘔ます」に、胃へ送る。丸呑(「に」す。のみこむ。

のみを飲む 飲む「動四他」口より入れ、喉を経て、胃に送る。「嘔む」。「嘔ます」に、胃へ送る。丸呑(「に」す。のみこむ。

のみを飲む 飲む「動四他」口より入れ、喉を経て、胃に送る。「嘔む」。「嘔ます」に、胃へ送る。丸呑(「に」す。のみこむ。

のみを飲む 飲む「動四他」口より入れ、喉を経て、胃に送る。「嘔む」。「嘔ます」に、胃へ送る。丸呑(「に」す。のみこむ。

のみを飲む 飲む「動四他」口より入れ、喉を経て、胃に送る。「嘔む」。「嘔ます」に、胃へ送る。丸呑(「に」す。のみこむ。

のみを飲む 飲む「動四他」口より入れ、喉を経て、胃に送る。「嘔む」。「嘔ます」に、胃へ送る。丸呑(「に」す。のみこむ。

のみを飲む 飲む「動四他」口より入れ、喉を経て、胃に送る。「嘔む」。「嘔ます」に、胃へ送る。丸呑(「に」す。のみこむ。

「誤つて、銅貨を呑む」吸ひこむ。吸ふ。「煙草をのむ」吸ひこむ。侮る。本年記「近隣を犯し奪ひ、頓(ひ)て八幡山(「八幡」陣を取りて、勢、京洛を呑む」一代當その男大夫に氣を呑まれ」懷中に隠し持つ。「短刀を呑む」(「商」呑(「」をなす。「賣」を呑む「買玉」を呑む)

呑みも切らず、飲みも切らず(「句」決斷の鈍き聲にえみならず。半吞半吐。飲む程に、酔ふ程に、又飲む程に「句」酒杯の数を重ねて、酔の進む形容。「諺語」)

のみを飲む 飲む「動四自」酒を飲むといふべきを、目的語を略していへるもの。酒を飲む。「打つ、買ふ、飲むの三道樂(「三」萬壽年のはに春の來たらば斯くしこそ梅をかざして樂(「」しくのまめ)のむ祈む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

のみを飲む 飲む「動四他」請ひ願ふ。いのる。

(喉笛)に同じ。「古語」和名、乃牟度布江」

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のみむら 野村「名」(「地」美濃國掛妻(「郡」掛妻町の別稱。日(「地」明治の初年設置の縣の一。四年、同縣・笠松・大垣・今尾・高富郡上(「」・岩村・苗木・加納の諸縣及び三年以來、廢藩の上名古屋藩に屬したる高須藩の地を併せて、美濃全國を管する岐阜縣を置けり。日(「植」次條の略。

のんき

泰然。目少しも頓着せぬこと。平氣。
のんきじん 呑氣人 暢氣人 暖氣人 (名)
のんきなる人。ひまじん。のんきもの。
のんきもの 呑氣者 暢氣者 暖氣者 (名)
のんきや 呑氣屋 暢氣屋 暖氣屋 (名)
前條に同じ。

のんこ『名』『のんき(呑氣)の轉か』のら
らしきこと。又その人。じだらく。のらも
の。女發油地獄「烟草」服致さうかと、腰打
掛くもの。のんこらし。〇づらうしく
て、そ知らぬふりをする。又その人。
あつかはづら。しやあしやあ。しやあつ
く。〇のんこまけ(のんこ)の略。天の鶴
鳥「のんこに髪結うて、野良」のらしい、伊
達衆自慢と云ひそな男。

のんこの頭(う)『句』のんこあた(ま)の
んこ頭に同じ。心中庚申「血氣さかり、
立ちかけのんこのあたがち」
のんこのしやあ『句』次條の略。
のんこのしやあつく『句』次條に同
じ。

のんこのしやんこ『句』のんこに同
のんこあた(ま)のんこ頭(う)のんこ
を結ひたる頭。後室色絹絲髪づくりの
のんこあた(ま)。

のんこつ『名』桐の材にて作り、薩摩國の
農夫の用ふる。一種の烟草入(う)。
のんこまけのんこ鬚『名』江戸時代の、
男の髪を結ひ方の一。主として、伊達衆
などの間に行はれしもの。のんこ。
のんこわげ。

のんこわげのんこ鬚『名』前條に同じ。
太本記「角前髪(う)のんこわげ」膝
栗毛「久しうのんこ鬚に結うてちやあつた
が、今は流行らんさかひ、……雷子(う)に
結うて貰うたが」
のんこ『感』語句の下に添へて發する語。
のんこ『名』「さうてのんし」
のんこ『名』「動」のんこ(音便)
のんこ(音便)「未食鹽」に同じ。

のんこ『名』「佛」のんは暖の字の宋
音の訛『のんれう(暖察)に同じ。一説に、入

のんせき

寮を賀することといふ。聖德太子抄「入
院を賀するを、暖寺(う)といふ。その席を
かたむき心なり」
のんせき 暖席(名)『佛』のんは暖の字
の宋音の訛『のんれう(暖察)に同じ。運步
色葉集「暖席、ノンセキ、學事」
のんせんす(英 Nonsense)『名』意味を成
さぬこと。馬鹿げであること。無意味。
無神經。

のんたぐれ『名』「飲んだ上にも、なほ呉
れよとの義」酒に酔ひてたわいなきこ
と、又その人。〇酒を多量に飲む人を罵
る語。のんべえ。
のんたう 飲太郎 吞太郎(名) 〇飲酒
に溺るる者を、人名に擬していふ語。の
んべえ。のみすけ。八笑人「左次郎とて、
生れつて吞太郎」〇無錢にて、芝居な
どを見物する人。てんばふ。

のんぞ 喉咽(名)『のんぞ(喉)の音便』の
ぞ(喉)に同じ。著明「酒買へかし。我も飲
み、そにものんだうへたまへ」
喉に迫る『名』運命盡きんとす。九死
一生の場合となる。太本記「三條殿、謂
れなく師直が一家を亡さんと御用
意、事已に喉に迫り候ふ間」
のんぞぶえ 喉笛 喉吹(名)のぞぶえ
(喉笛)に同じ。増補下學集「喉、ノンド
ブエ」

のんぞり『名』のぞ(長閑)に同じ。紅梅
千句「梅津の邊に多き春草(長閑)のぞり
にのんどりと神垣廣き宮どころ(音便)」
のんの(名) 〇一幅(う)毎にすること。
浮世風鳥「布子(う)の裏をの、布布(う)に解
いて見たら、手を當てる所がびりびり
さ」〇のの音便。〔幼兒の語〕目乗る
こと。〔幼兒の語〕

のんの(か)さ 式部省(名)のりのつかさ
(式部省)の音便。建武年中行事「内辨、のん
のつかさを召す」
のんびり『名』のん(伸伸)に同じ。
のんぶる(佛 Numb)『名』原語は數の
義「べえじけ(負附)に同じ。又、その部分
に六號等の小活字にて、その書籍の題

目、篇章の數などを印刷せるをいふ。
「印刷業者書籍業者など語」
のんべんぐらり『名』爲す事もなく、空し
く時日を費すさま。のんべんだらり。べん
べんだらり。
のんべんだらり『名』前條に同じ。
のんべえ 飲兵衛 吞兵衛(名)のんたう
のんべ(飲太郎)に同じ。
のんやぼぶのんやぼ節(名) 昔の端
歌(う)の節の一。のんやぼといふ語を
添へて嘲しもの。松の葉「のんやぼぶ
し。晩にござらばひなたさいてござれ、
ござれ。晩にや梅の木枝おろそ。のん
やぼ、のんやぼ、のんやぼ」
のんやぼぼをどりのんやぼ節(名)
昔、のんやぼ節に合はせて演ぜし踊。二代
男「禿(う)揃へてのんやぼ節」
のんれう 暖寮(名)『佛』のんは暖の字
の宋音の訛「禪家にて、入寮する人が、古
參の人人に茶菓などを授すること。のん
じ。のんせき。のんじ暖寮參照」
のんれん 暖簾(名)「勤修清規月分須知
に「四月候二天氣、僧堂内、下二暖簾、上二涼
簾」とあり。のん(暖簾參照)「禪寺に
て、常の簾に、綿布を覆ひて、風氣を防ぐ
に用ふるもの」
のめ 船如細衣細柳(名)まいはだ(膚皮)
に同じ。和名「細、周易注云、衣細、夫爾乃
能來。所以雲二舟漏也」
のめくる 滑る(動四自)ぬめる(滑る)に
のめく(滑る)のめくし込む(動四他)無理
に押し込む。強ひて食はす。
のめくまげのめくし鬚(名)丸鬚の一種。
根高く、前後短く(鬚)は却つて長く低く
結ひたるもの。江戸藏前「邊の女結ひ
創めて、弘化の末より、嘉永にかけて行は
れたり。くらまへう。のめくまげ」
のめくまげのめくし丸鬚(名)前條
に同じ。

のんべ

のめす『接尾』動詞に添へて、その動作を
賤しむ意を示す語。「しやれのめす」
のめずりこむのめずり込む(動四自)
のめりて陥る。〇何時(う)の間に入
り込む。いつのまにか引きすりこむ。
のめりめ『名』おめおめに同じ。曾根崎中
「この銀を、のめりめと、只、おのれに
取られうか」
のめら『名』なめら(滑)の義「平面にて、凹
凸の變化なきさま。模様などなく、單調な
るさま。のつべり。のつべら」
のめり『名』のめりけた(のめり下駄)の略。
のめりあるく 滑歩く(動四自)ぬめりあ
りく(滑歩く)に同じ。
のめりけたのめり下駄(名)『歩む度
に、爪先の部分低く地に付き、身體のめ
る氣味なるによりていふ』駒下駄の前
部の裏面を斜に切りたる造り方、又その
駒下駄。
のめりりのめり『名』のめりめに同じ。曾根崎
羽子板「鶴と龜めが、何打食(う)つて、すっ
百萬元、のめりりのめりと、くたばりはづ
れるにあやかりなされ」
のめり(動四自)前へ倒る。つんのめる。
のめら『名』太兵衛を援援(う)み、土にぎや
とのめらせ。〇前方へ倒れかかるやう
なる形に傾く。關八州警馬「夫婦の傍への
めり寄り」
のめりまはのめりか廻(名)のめりまはし。
「字廻」に同じ。
のめさき 野母崎(名)「地」肥前國西彼
杵(う)郡にあり。長崎半島の西南角。
長崎より十三里の處に當り、大草洋の西
北限をなす。附近多數の暗礁ありて、有
名なる難航路なり。
のめせ 野面(名)『野も狭(う)に』の
「狭」の意を誤解して用ひしもの『野のおど
りて。のづら。新千鳥蟲の音の露のやど
りに恨むなり野もせの月の有明の頃」俗
曲花柳歌集「春の野もせを詠(う)めな
がら」
のめり 野守(名)『野を守る人。野の番
人。伊勢「春日野の飛ぶ火の野守出てて見
よ今幾日(う)ありて若菜摘みてん」

のめす『接尾』動詞に添へて、その動作を
賤しむ意を示す語。「しやれのめす」
のめずりこむのめずり込む(動四自)
のめりて陥る。〇何時(う)の間に入
り込む。いつのまにか引きすりこむ。
のめりめ『名』おめおめに同じ。曾根崎中
「この銀を、のめりめと、只、おのれに
取られうか」
のめら『名』なめら(滑)の義「平面にて、凹
凸の變化なきさま。模様などなく、單調な
るさま。のつべり。のつべら」
のめり『名』のめりけた(のめり下駄)の略。
のめりあるく 滑歩く(動四自)ぬめりあ
りく(滑歩く)に同じ。
のめりけたのめり下駄(名)『歩む度
に、爪先の部分低く地に付き、身體のめ
る氣味なるによりていふ』駒下駄の前
部の裏面を斜に切りたる造り方、又その
駒下駄。
のめりりのめり『名』のめりめに同じ。曾根崎
羽子板「鶴と龜めが、何打食(う)つて、すっ
百萬元、のめりりのめりと、くたばりはづ
れるにあやかりなされ」
のめり(動四自)前へ倒る。つんのめる。
のめら『名』太兵衛を援援(う)み、土にぎや
とのめらせ。〇前方へ倒れかかるやう
なる形に傾く。關八州警馬「夫婦の傍への
めり寄り」
のめりまはのめりか廻(名)のめりまはし。
「字廻」に同じ。
のめさき 野母崎(名)「地」肥前國西彼
杵(う)郡にあり。長崎半島の西南角。
長崎より十三里の處に當り、大草洋の西
北限をなす。附近多數の暗礁ありて、有
名なる難航路なり。
のめせ 野面(名)『野も狭(う)に』の
「狭」の意を誤解して用ひしもの『野のおど
りて。のづら。新千鳥蟲の音の露のやど
りに恨むなり野もせの月の有明の頃」俗
曲花柳歌集「春の野もせを詠(う)めな
がら」
のめり 野守(名)『野を守る人。野の番
人。伊勢「春日野の飛ぶ火の野守出てて見
よ今幾日(う)ありて若菜摘みてん」

のめす『接尾』動詞に添へて、その動作を
賤しむ意を示す語。「しやれのめす」
のめずりこむのめずり込む(動四自)
のめりて陥る。〇何時(う)の間に入
り込む。いつのまにか引きすりこむ。
のめりめ『名』おめおめに同じ。曾根崎中
「この銀を、のめりめと、只、おのれに
取られうか」
のめら『名』なめら(滑)の義「平面にて、凹
凸の變化なきさま。模様などなく、單調な
るさま。のつべり。のつべら」
のめり『名』のめりけた(のめり下駄)の略。
のめりあるく 滑歩く(動四自)ぬめりあ
りく(滑歩く)に同じ。
のめりけたのめり下駄(名)『歩む度
に、爪先の部分低く地に付き、身體のめ
る氣味なるによりていふ』駒下駄の前
部の裏面を斜に切りたる造り方、又その
駒下駄。
のめりりのめり『名』のめりめに同じ。曾根崎
羽子板「鶴と龜めが、何打食(う)つて、すっ
百萬元、のめりりのめりと、くたばりはづ
れるにあやかりなされ」
のめり(動四自)前へ倒る。つんのめる。
のめら『名』太兵衛を援援(う)み、土にぎや
とのめらせ。〇前方へ倒れかかるやう
なる形に傾く。關八州警馬「夫婦の傍への
めり寄り」
のめりまはのめりか廻(名)のめりまはし。
「字廻」に同じ。
のめさき 野母崎(名)「地」肥前國西彼
杵(う)郡にあり。長崎半島の西南角。
長崎より十三里の處に當り、大草洋の西
北限をなす。附近多數の暗礁ありて、有
名なる難航路なり。
のめせ 野面(名)『野も狭(う)に』の
「狭」の意を誤解して用ひしもの『野のおど
りて。のづら。新千鳥蟲の音の露のやど
りに恨むなり野もせの月の有明の頃」俗
曲花柳歌集「春の野もせを詠(う)めな
がら」
のめり 野守(名)『野を守る人。野の番
人。伊勢「春日野の飛ぶ火の野守出てて見
よ今幾日(う)ありて若菜摘みてん」

謡曲の一。次條の野守の鏡の古事を、古歌と俗説とによりて作れるもの。一名、野守鏡(ノリノカガミ)。

野守の鏡(一)「袖中抄に、昔、雄略天皇と申す帝狩したまひけるに、御鷹逸(ノリノカガミ)れて見えす、野守を召して問はれけるに、御鷹の有りかを申す。如何に侍るに、かくさだかに申すぞと問はれたまひければ、この野の水に、影映じて侍れば申す由、奏しけるにより、野にある水を野守の鏡と申し傳へたるなり」とあり。野中にある水の、物の影をうつすを、鏡に譬(たとへ)ていふ語。新古今はし鷹の野守の鏡得てしがな思ひ思はずよそながら見ん」。

のもり野森(一)「野にある森。野中の森。薄葉集、木綿(一)だすき思ひかけずも見ゆるかな野森に添(そ)める月讀の神」。

のもりくさ野守草(一)「植(は)き萩(は)の異稱。薄葉集、萩。野守草」。

のもりのいけ野守池(一)「地(ち)野守の鏡」の條に引ける袖中抄の傳説に本づき、古今集と伊勢物語との歌に、「春日野の飛ぶ火の野守」といふ語のあるを思ひ合はせて、後人の作り設けし名なるべし。大和國の春日野にありし池。今、雪消(ゆき)の澤の東方鷺原に、その形を存すといふ。のりのかがみ」。

のもりのかがみ野守鏡(一)「のり(野守)の鏡」に同じ。地(ち)前條に同じ。

のや野矢・野箭(一)「簡略なる征矢(や)」。白鏡(しら)に丸根の鐵をすげ、羽は何の羽に限らず、その端を野ることなく、狩獵に用ふるを主とし、又、内裏の火事、洛外の行幸等に、武官・隨身などの帶せしもの。ししや。著國滋藤(ししや)の弓に、野矢貫ひて、竹笠を著たりけり」。

のや野屋(一)「野にある家。野中の家のやき野焼(一)」。野を焼くこと。春になりて、草をよく生ぜしめんために、冬の頃、野に火を放ちて、枯草を焼くこと。のび野火参照。蛭炙(むし)あはれしや野焼にもれしみねのわのむら草がくれ雉子(けし)も

鳴くなり」。「英(Hepp)rocking」鑽石を、地面に積み重ね、その下に裝置したる薪に點火し、徐徐に焙焼しめ、鑽石中の硫黄を、亞硫酸瓦斯に化せしめ、精鍊の原料となる酸液を殘留せしむる方法。昔時より用ひ來りし幼稚なる方法なり。

のやくま野役(一)「江戸時代の小物成(やくま)の」。荒野などの、他村との境界の分明ならざるによりて、争論の起るを慮り、後日の證據に上納せし役。のやくま野屋作(一)「野屋を作ること、又その家。新嘉坡(シンガポール)州飾磨(しきり)の市立(しり)盛(さか)りたる野屋づくり」。

のやぶ野藪(一)「のらやぶ(野ら藪)に同じ。荒藪野やぶのごとくおそろしげなるものから」。

のやま野山(一)「野と山と。野又は山。山野(やま)」。江戸時代に、高知藩にて、人民の牧草刈取場の内に、人民の願出により、植林を許して、伐採せしめし特別の區域。野又は山にて、耕作などの仕事をなすこと、又その仕事。源氏十段長生鳥(ながせい)の御馬は、信夫(しんぷ)の土民が、耕作のため野山を致させ候ひしが」。

野山に入る(一)「山野の間に、浮世を避く。世をのがる。遷世。空鶴(そら)今は、心に任せて、野山にも入り、法師にもなりなんぞいひける」。

のやまぞち野山育(一)「野山にて育ちて、性質の粗剛なること。曾我五人兄弟「野山育の荒百姓」」。

のゆさん野遊山(一)「野外に出てて遊ぶ山すること。即ち櫻狩・紅葉狩・摘草・茸狩などの類(船遊山(ふね)に對して)。松風村雨來(まつふうむら)盤(ばん)今日は、空も長閑にござれば、野遊山がようござりませう」。

のら野(一)「のらは接尾語(のら)の(野)に同じ。古今里は荒れて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる」。「やぶ(藪)に同じ。名義抄、藪ノラ、オドロヤブ」。

のら野良(一)「語源上の(純)に關係ある語。野良は假借の文字。のらくら參照」。

「なまけること、又その人。ぶしやう。のらくら。遊惰(遊惰)如來誕生會「野良かわいて、仕べい役をほからし」御伽名代紙衣「この男を家の内へ置けば、大勢の婢僕(べい)の者が、見習うて、のらになる」馬鹿をつくること、又その人。たはけ。どら。放埒。放蕩。曾我虎が「無比の野良を盡し」

野良の節句(せきぐ)「句」。「なまけるの節句(せきぐ)に同じ。『談語』

のら(一)「(一)諾威(ノルウェー)國イブセン(イブセン)の戯曲「人形の家に」、新思想の自覺によりて、夫と子供とを捨てて家出する由を記せる、その主人公なる婦女の名」。

「新しき女」に同じ。

のら「接尾」の(は)助辭(は)等(ら)に同じ。一説に、のは尊敬の義といふ。「古語」萬葉「水鳥の立たむよそひにいも妹也」のらにもの言はず來(こ)にて思ひかねつもの」。

のらいぬ野ら犬野良犬(一)「飼主の無き犬。野原などにさまよふ犬。やどなし。いぬ。若風(わか)とくは、今の世間に、野ら犬の子と金銀の澤山なる故に、萬事奢りて」。

浦島太郎(うらしま)野良猫(やらねこ)「野良犬か」。

のらえ野狂(一)「植(は)し(紫蘇)に同じ。和名在。其實黒者曰蘇、乃良江。一云、奴加江」。

のらかせ野ら風(一)「野らを吹く風。のかぜ。好思集「ひとり寝るわが身は荒れて草村の野ら風よりも寒くもあるかな」

のらへり野ら歸(一)「野らばたらきを終へて、自宅に歸ること」。

のらがらす野ら烏野良烏(一)「鳩のなき鳥。宿なしの鳥。常にその場處に入。往來して、事情に慣れるもの。のら者。徒然(とら)世世(せ)九野(く)阿波座(あ)の野良烏」。

のらき野良著(一)「野ら働(はたら)く時(とき)の著物。のらくら(一)のらに同じ。傾城反魂香「日がな一日立ちずくみ、何をするやら、のらくらと急げばまはる瀬田(せ)鏡」

のらくらなまのらくら仲間(一)「のらくらと遊び暮す仲間。ぬらくらなま。のらくらくなかま」。

のらくらものらくら者(一)「のらくらとして居る人。なまけもの。のらもの。のらくらもの」。

のらこき野良放(一)「こ(く)放(は)くを見よ」なまけること、又その人。

のらこころ野良心(一)「のらつく心。なまけこころ。のこころ。俳諧古選(きん)かしく「狐(きつ)ぶ女猫(に)にくしやのら心」

のらこころ野ら聲(一)「農夫の、田畑にて發すること、大なる聲。太きこゑ。のらさう野良藏(一)「のら者、人名に擬していふ語。のらさく。のらまつ」。

のらさく野良作(一)「前條に同じ。

のらさる野良猿(一)「のらもの(野良者)を卑しめていふ語。本朝三國志(ほん)くに立たずの野良猿め」

のらじふ野ら仕事(一)「田畑に出てて仕事をすること、又その仕事。耕作の仕事。のしごと。のらばたらき。農事。のらす宣らす告らす(動四他)のる宣(の)の敬語。のりたまふ。のたまふ。仰す。萬葉(ま)岩木(い)よりなりてし人(ひと)か汝(み)が名のらさね」

のらさる野良雙六(一)「一」雙六の一種。延寶年間頃より行はれたり。のらざんざん野良ぞんざん「名」敬埒(けい)にて、疎略なること。夕霧阿波(ゆ)の鳴渡(な)のらぞんざいのわしが身」

のらつき(一)「のらつくこと。根柢(ね)志(し)其佐「役者ののらつき、職人の小いそがしき」

のらつく(一)「動四自」のらくらとす。ぬらりくらりとす。色道に耽る。のらめく。のらうぼ野良とす「名」のらもの(野良者)に同じ。心中(しん)背(せ)庚申(こう)こりや、のらうぼ、今朝卯(け)の刻から、内(うち)を出て、何時(いつ)ぢやと思ふ」

のらともだち野良友達(一)「互(た)にのらつく友達。あそびともだち。道樂(み)ともだち。友達(とも)あそびともだち。道樂ともだち。友達や寒念佛(ごん)佛」

のらな野ら中(一)「のらの中。田畑の間。のなか。太田(た)野ら中に土御門(と)家の(に)や冬至(ふ)の日」

法の皇(みこと)【句】ほふわう(法皇)の直譯。千鶴わが法の皇に仕へまつりては、三十(ふた)になん餘りにければ、

法の末【句】末法の世。末世(しよ)。澆季。拾玉法の末を今こそ神も照すらめ

君が添へつる言の葉を見て」

法の袖【句】法の衣(ころも)の袖。法衣(ころも)。大徳冠(紅)の血(み)を佛の法の袖に

法の薪【句】【佛】薪(きりぎりす)を燃る」

を見よ。千五百番歌合「谷の水峰の風をしのびても法のたぎに逢ふぞ嬉しき」

蕭曲鉢木「ただ徒(た)なる鉢の木を、御身のために焚くならば、これぞ、まことに難行(なんぎやう)の法の薪とおぼしめせ」

法の垂乳男(たてちち)【句】【佛】『ほふにやう(法乳)を見よ』佛教を、親の如くに親しみ頼みていふ語。王(み)集うき世にて身はみなし子となりはてぬわれ迷はすな法のたちを」

法の誓(ちか)【句】【佛】『ほふせい(法誓)の直譯。羅摩歌「血刀(ち)のりの誓も頼もしや」

法の力【句】【佛】ほふりき(法力)の直譯。公作集「限なき法の力にときふる守はいとど頼もしきかな」

法の塵【句】佛法を汚す物事を塵に譬へていふ語。ほふちん(法塵)参照。拾玉「いかにせん御法の塵を拂ふにもしみの教やなほ残らん」

法の月【句】【佛】真如(しんご)の月に同じ。新勸翼法の月久しくもがなと思へどもさ夜ふけにけり光隠しつ」芭蕉「その鏡は羽黒に返せ法の月」

法の勤【句】ごんぎやう(勤行)に同じ。兼好集「おくれぬであととふ法のつとめこそ今はかなき名残なりけれ」

法の綱【句】【佛】これを手に取れば、佛法結縁のたよりとなるといふ綱。法(の)の結「善の綱」参照。孕常盤「現世(の)後生(の)も、父母に二筋引きし法の綱」

法の杖【句】【佛】法にたよるを、杖に譬へていふ語。吉野忠信法の杖、つくづつ物を案ずるに」寺参するに、杖を突きて行くこと。兼好「夢刈りぬ近道來ませ法の杖」

法の唱【句】【佛】菩薩の御名を唱ふること。念佛。唱名(なう)参照。法の(の)の稱名。蓮華法のとなへ」

法の友【句】ほふりやう法友の直譯。源氏「かへりては、心はぶかけなる法の友にこそは物したまふなれ」

法の燈火【句】【佛】ほつさう(法燈)の直譯。兼花「法の燈火をかがげ、佛法の命をつがせたまふ」ほつさう、佛燈に同じ。

法の流【句】ほふりやう(法流)の直譯。新後拾遺「誰にまた問はば答へんわが山の法のながれの深き心を」

法の場【句】ほふぢやう(法場)の直譯。千鶴春ごとに歎きしものを法の庭散るがうれしき花もありけり」

法の橋【句】ほけう(法橋)の直譯。夫木「のりの橋の下に年ふるひきがへる今ひとあがり飛び上らばや」

法の端舟【句】【佛】小き法の(の)舟。玉葉目しむたる龜の浮木に逢ふなれやまたま得なる法の端舟」

法の蓮【句】【佛】妙法蓮華の稱。雙生蘭田川「法の蓮の絲長く、五色に染めし曼陀羅に」

法の蓮葉【句】【佛】蓮(の)の臺(の)に同じ。八陣守護歌「こなたも、法の蓮葉に至らせたまへ、南無妙法蓮經、法蓮經、法蓮經と唱ふる功德は」

法の華【句】【佛】ほけ(法華)の直譯。佛道の精華。新勸翼「山深みまことの道に入る人は法の花を葉にはする」新六「あひがたきやまじきの法の花の紐すぶ契は空しからじを」

法の花園【句】てんわうじ(天王寺)に同じ。

法の林【句】佛道の繁り榮ゆるを、林に譬へていふ語。兼子監「散残る法の林の梢には言葉の花の色ぞ少なき」

法の火【句】「法の燈火(の)に同じ。拾玉法の火を君かかげずばいかにせん我が立つ梢の夕闇の空」

法の光【句】法の(の)火の光。佛法の華光(けう)。兼好集「篝火のかげも騒がぬ池水に幾千代すまん法的光ぞ」

法の人【句】法の(の)道に入りたる人。法師。僧。蕭曲大原御等「法の人、同じ道にと頼むなり」

法の淵【句】【佛】佛法の深遠なるを、淵に譬へていふ語。法の(の)海。拾玉「末を汲めわが山川の水上(の)にみ法の淵は有り」と知らずや」

法の舟【句】【佛】ほふしゆ(法舟)の直譯。新古今法の舟さして行く身ぞももるの神も佛も我を見えなへ」蕭曲兼平「矢走(の)の浦の渡守……同じくは、この舟を、御法の舟に引きかへて、我を、又、彼の岸に渡してたばせたまへや」

法の書【句】【句】おきてを記せる文書。法律書。紀「律令、ノリノフミ」同「法令、ノリノフミ」

法の眞水【句】【佛】「法の水」に同じ。蕭曲木屐「盧生の古を思し召さば、心の底までも汲みて知る、法の眞水と思し召して、飲酒の心解けて」

法の身【句】法の(の)人たる身。出家の身。僧侶。新勸翼「法の身の月はわが身を照せども無明(の)雲の見せぬなりけり」

法の御門【句】【佛】法の(の)皇(の)に同じ。夫木「法の御門ひじりの君」

法の道【句】ぶつだう(佛道)に同じ。拾遺「いつしかと君にと思ひし若菜をば法の道にぞ今日は摘みつる」

法のの水【句】【佛】ほふしゆ(法水)の直譯。蕭後集「法の水さす心の清ければける袖と誰か見るべき」兼好「あはれ、みのりの水の泡の、消えゆく心になりねれば」

法の水上【句】【佛】法の(の)水のみなみ。佛道の淵源。新拾遺「うづもれぬ法のみなみか跡しあれば代代の流は君ぞ知るらん」本山「本寺。在言宗廟「法のみなみなれば、甲斐の身延(の)へ参り」

法の筵【句】【佛】ほふえん(法筵)の直譯。千鶴更にまた花ぞ降りしく鶯の山法のむしるの暮方の空」

法の文字【句】佛法に關する文字。梵字。夫木「かちのくのえぞが千島の鶴の羽に妙(の)なる法の文字もありけり」

法の山【句】【佛】ほふせん(法山)の直譯。蕭曲長良「法の山、風月ふけて、光やはらぐ春の夜の眠を覺ます鼓(の)鼓(の)」

法の業【句】【佛】佛法に關するしわざ。法事。佛事。法の(の)事業(の)に同じ。起功徳「ノリノワザ」

法の會【句】【佛】ほふえ(法會)の直譯。選集今日のみのりのをまたづねおぼさば、罪をゆるしたまひてよや」

法の教【句】【佛】ほふけう(法教)の直譯。ぶけり(佛教)に同じ。玉葉小車(の)のりの教を頼まらずばなほ世にめぐる身とやらまし」

のり糊【名】物に塗りて、その物を貼りつけ、又は硬(こ)ばらせて、一定の形を保たせんとするに用ふる、粘着力ある物。飯生鉄(の)布海苔(の)・ゴムなどを材料とす。

糊かつた天神様【句】『天神様の像は、只さへ端然たる姿に造るものなる上に、糊を附けたる布帛にて造りたるものとの義』形もくさねほどにすましてをる人を嘲りていふ語。糊食つた天神様。【諺語】

糊食つた天神様【句】前條に同じ。【諺語】糊と剪刀(の)【句】腦力を費さず、他書(の)所を切り取り貼り合はせて、原稿を作ること。

糊を置く【句】糊を塗る。糊つけをす。太紙「糊おける絹に東風(の)行く門邊かな」

糊をかふ【句】物に一定の形を保たし

こと。あがりあり。昇降。
のりおろす 乗下す【動四自】馬に乗りたるまま、高き處より低き處へ下る。百日會戰「駒引き寄せ、打乗って……谷を乗り越え、乗りおろし」

のりかかる 乗掛る【動四自】乗りにて、その物に及びかかる。のつかかる。大磯虎種物置、膝の上に乗り掛る。乗ることに取いかかる。乗らんとす。のりだす。なしはじむ。著手す。四の（乗る）に同じ。八美人相手がしかりだと、ぐつと乗りかかつてするから、大きに仕いい」
乗り掛つた馬【句】一旦馬に乗りて走らせたる上は、途中にて下ることは、容易に出来ぬこと。【諺語】二天條馬はあれど、君を思へば、夜毎に通ひ、人の咎もかへりみず」

乗り掛つた船【句】一旦乗船したる上は、航行の中途にて下船することは、容易に出来ぬこと。乗り出した舟は止められぬ。【諺語】五人女「乗りがかった船なれば、節摩津」より暮を急ぎ」
既に著手したる上は、行きがかり上、中止することは出来ぬこと。乗出した船は止められぬ。【諺語】八笑「ちよつとどうするものか。乗りがかった船だ。出掛けよう、出掛けよう」

のりかかる 仲掛る【動四自】のしかかる（仲掛る）に同じ。
のりかく 乗掛く【動下二他】乗りたるままにて突く。のりあぐ。のつかく。
のりかけ 乗掛 乗懸【名】江戸時代に、宿驛の駄馬一頭、一人一人と二十貫目の荷物とを乗せて運びしこと。兩者の目方、合はせて三十六貫目内外なる上に、蒲團中敷、小附跡など、凡そ三四貫目を加へて、總計四十貫目程のものとなる。本馬（乗）。舊稱、乗尻（の）。五人女「通駕籠（か）か乗掛て参らずに、物好（お）なる拔都（か）山」註要「あの乗掛を見な。がらぎに蒲

團が重ねてあらあ」二天條の略。若風俗「乗掛一正の足音あて」
のりかけうま 乗掛馬、乗懸馬【名】乗掛の駄馬。のりかけ。一代男「大阪の黒舟といふ乗掛馬」名乗の友「返鑑に船五差（か）贈られければ、乗掛馬に付けて、能登國へ歸りければ、何をかし」

のりかけに 乗掛荷、乗懸荷【名】乗掛のりかたづく 乗傾く【動下二他】船に、多人數乗りて、傾く程にす。保元「一陣の舟に兵三百餘人、射向（ま）の袖を差懸し、舟を乗り傾けて、三町ばかり渚近く押寄せたり」

のりかはあみ 乗川網【名】川網などを捕ふるに用ふる、一種の袋網。横七八尺、長さ五尋、上に浮子（うきこ）を附け、下に沈子（しづこ）を附けて、その間僅かに四寸ほどなれども、浮子は浮き、沈子は沈みて、網の口を開き、長き竹を、網の兩端に附けて、その端を餘し、二人づつ乗りたる小舟二艘にて、網を狭み、魚の入るを待ちて、手早く引き上げ、兩方より絞（し）り寄するもの。

のりかひもの 糊かひ物【名】糊をかふを見よ。布帛などの、糊を附けて、硬（こ）ばらせたもの。心中「庚申」糊かひ物が干（かわ）あがろがな。とりえて、疊（たた）んで、打盤（うちは）して、ちよきちよきと打て」
のりかふ 乗換ふ、乗替ふ【動下二他】或乗物を下りて、他の乗物に乗る。取換へて乗る。乗物を取換ふ。のりうつる。馴れ親しみし心を、他の人の方へ移す。とりかふ。のりうつる。抱野郎「本地」わが方へは、家出したりと嘘ついて、世繼に乗替へくさしたか。春花「五大力」なんと、身どもに乗りかへるといふ。そちが起請、同然ぢや」

のりかへ 乗換 乗替【名】乗りかふること、又その物。替へて乗るための、豫備の乗物主として馬。又それを預かる人。副乗。今書「客人……頼光朝臣の家にして、客人數乗りて酒吞み遊びに、乗替の馬などに乗りて」和合人「駕籠を揃へて置きやした。……六挺拵（か）へておい

たのは、……一挺は、用意の乗替き」目大將の乗替の馬を預かりて乗る侍。慶長記「乗替を便にて、木曾殿へ申しける」馴れ親しみし心を、他の人に移すこと、又その物。とりかへ。津渡女「乗換の女郎の恨の夜夜を」二商「定期取引にて、賣買したる物件の期月を變更すること。即ち當期にて賣買せる物件の轉賣買戻をなして、これと同一額の物件を中期にて賣買し、先期にて賣買せる物件の轉賣買戻をなして、これと同一額の物件を中期若しくは先期にて賣買し、中期にて賣買せる物件の轉賣買戻をなして、これと同一額の物件を中期若しくは先期にて賣買する」といふ。【取引所の語】

のりかへり 乗換賣【名】（商）前條圖を見よ。【取引所の語】
のりかへり 乗換買【名】（商）のりかへ（乗換圖）を見よ。【取引所の語】
のりかへり 乗替切符【名】汽車電車などに、乗換のしるしに渡す切符。
のりかへり 乗換場、乗換場【名】汽車電車などに、乗換をする場處。
のりかへり 乗換船【名】小き關船を陰船にて、大將の乗換の料、又は陣中の巡見、遠淺の端舟に用ひしもの。

のりかへる 仲返る【動四自】甚しく仲利剣と、ぐつと刺され、引据ゑても、のり返り、七頭八倒」
のりからみ 海苔掬【名】魚の身を掬り崩し、青海苔を加へて、湯びき、少し炙りて切れば、海苔の形、筋の如く見ゆるに、薄たれをかけたる食品。
のりき 乗氣【名】興味に誘はれて、調子づきであること、又その心のりぢ。きのり。和合人「もうたつた一ツ噴ふべえと、土場六郎が噴へば、張吉（お）も同じく乗氣になり、お前（か）たちも、なせ噴はねえだらう、これ程甘（か）い物を」

のりきは 糊際【名】糊を附けたる邊。
のりきり 乗切【名】乗りにけること。のりどほし。のりづめ。昔の戰にて、敵の崩れて退きかけたるを見はからひ、馬上にて、その中に乗り込み、押し隔てて、味方の者に、首を斬らしめしこと。のりきる 乗切る【動四自】乗りにたるままにて行き過ぐ。のりづめにす。のりける。乗物に乗りて越ゆ。乗物に乗りてつち切る。のりこゆ。浪を乗切る。進みて、事に當る。のりくす 乗具す【動五他】相具して乗る。一緒に乗る。十訓「御堂（か）入道殿、……帥（か）の内大臣の御車に乗り具して、一條攝政の許へおはしけるに」

のりくち 乗口【名】馬を牽くに、轡（ひも）の所（へ）下（り）て、差繩（さじ）を取ること。一説には、手綱にて牽くことなりと。平家「多くの馬どもを見けるに、……あるひは乗口に引かせ、あるひは諸口（もろぐち）に引かせ」
のりくつ 乗沓【名】昔、馬に乗る時に用ひし沓。多くは、革にて作りたり。今川大雙「主人に乗沓召さすべき事」
のりくつし 乗崩【名】のりくつすること。のりくつす 乗崩す【動四他】敵軍に馬を乗り入れ、崩れ立たしむ。
のりくつわ 乗轡【名】轡に、羈絆（か）と手綱とを附けたるもの。
のりくに 則國【名】（人）あはたぐちのりくに（粟田口則國）を見よ。

のりくひうま 乗喰馬【名】人の乗るを繰ひて、食ひつく馬。
のりくみ 乗組【名】乗り組むこと、又その人々。のりこみ。のりあひ。
のりくみおん 乗組員【名】船に乗り組みて、その船の事務を取扱ふ人。船員。船舶職員。
のりくむ 乗組む【動四自】船に、團隊の一人として、共に乗る。
のりくら 乗鞍騎鞍【名】人の乗るに用ふる鞍（荷鞍に對して）。太平記「敵陣の近隣に在りて、青麥を打刈らせて、乗鞍に負（か）せてぞ歸りける」
のりくらうま 乗鞍馬、騎鞍馬【名】乗鞍

を附けたる馬。甲馬軍。猿馬。牛の皮剥ぐ
 のりくらがだけ 飛脚獄〔名〕〔地〕飛脚
 山脈中の一峯。飛脚國古城〔名〕大野益
 田〔名〕の三郡と信濃國南安曇〔名〕郡と
 に跨り、南北に並列せる多數の消火山より
 成る。最高點は九九九一尺。
 のりくらし 乗暮〔名〕昔の船軍にて、船
 を漕ぎ出して、間もなく日の暮るること。
 (乗明〔名〕に對して) 〃の氣味。
 のりけ 糊氣〔名〕糊のけ。糊の附きてあ
 糊氣が離る〔句〕糊氣の失せたる布
 帛に似たるよりいふ。糊をかふ參照
 空腹にて力の出でぬ響。〃といふ。
 のりけのり毛〔名〕鷹の白き綿毛なり
 のりえ 乗越〔名〕乗り越ること。又、
 乗り越えてあること。
 のりぢぢ 乗心地〔名〕乗りたる氣も
 ち。のりぢぢ。〃乗る心得。
 のりごころ 乗心〔名〕前條に同じ。
 のりこじ 糊漉〔名〕煮たる糊を漉すこ
 と、又それを用ふる品物。
 のりこじ 乗越〔名〕乗り越すること。又、乗
 り越してあること。
 のりこじ 乘輿〔名〕のりま(乘馬)を
 見よ〃與に乗ること、又その輿。
 のりこじぶくろ 糊漉袋〔名〕糊漉に用
 ふる布袋。
 のりこす 乗越す〔動四自〕乗りて、そ
 の上を越す。のぼりて越す。のりこゆ。
 のりこす 〃一擧を乗り越す。〃乗物に乗
 りて、その上を越す。のりこゆ。のりこす。
 平家女藏鳥「乗り越す汐には、抜手を切り」
 〃乗物に乗りて、進むこと。のりこゆ。
 のりこす。のりぬく。〃汽車、電車などに
 て、目的地又は規定の場處を通り越して、
 その先まで乗る。乗りたるまま、行きす
 ぐ。のりこす。
 のりぢぢ 詔令〔名〕のりぢぢこと。の
 りぢぢ。命令。〔古語〕詔令三諸國ハクニ
 グニニ、ノリゴヂシテ
 のりぢぢ 詔つ令つ〔動四他〕次條の
 語の語尾を活用したる語。はかりぢぢ謀

つ。みどりつ(獨言)まつりつ(政つ)
 などと同類の語のたまふ。仰せらる。
 令す。ごつ。記このただよへる國を作
 り固めなせとのりぢぢて。〃令三群臣
 日、ノリゴヂテ
 のりこす 告言・宣言詔〔名〕宣(り)聞
 かする言葉。おほせ。みこのり。命令。
 〔古語〕詔令三有司……ノリゴヂシテ
 祝詞「天つりのりぢぢて」
 のりこす 法事〔名〕ほぶ(法事)の直譯。
 のりこす 乗熟す〔動四他〕悍馬を、
 思ふがままに操縦す。〃御しにくき人
 物を、巧に統御す。
 のりこす 糊強〔名〕附けたる糊の濃き
 ため、布帛などのこはばるさま。續猿轡
 〃糊こはな帷子(きん)かぶる晝寝かな
 のりこほる 乗溢る〔動下二自〕乗物の
 外にはみだすほどに乗り込む。衣服のは
 しはしが乗物より溢れ出づるまでに乗り
 込む。源兵よろしき女車、いたう乗り
 こばれたるより、扇をさし出でて、人を招
 き寄せて。〃
 のりこみ 乗込〔名〕乗り込むこと。〃
 昔の戦にて、敵陣の隙を見はからひて、
 馬を乗り入れ、陣を亂して引きあげしこ
 と。〃一組の者が、或場處に繰込むこと、
 又その式。〃旅役者の乗込
 のりこみやり 乗込槍〔名〕乗込の時
 に用ふる槍。
 のりこむ 乗込む〔動四自〕乗物に乗
 りたるまま、その中に入り込む。のりこ
 む。のりこむ。〃人々の中に入り込みて
 乗る。大勢と共に乗る。〃一組の者が、
 或場處に繰込む。
 のりこむ 乗籠む〔動下二他〕乗物を進
 めて、相手に圍む。平家、雜人原をば唐船
 に乗せて、源氏心にくきに、唐船を攻め
 ば、中に乗り籠めて討たんと支度せられ
 たりし中にも
 のりこゆ 乗越ゆ〔動下二自〕のりこす(乗
 越す)〔動四自〕に同じ。萬代、風わたる浦の
 みなのの汐さきに波乗り越えて鳴くな
 り〃盛衰死ぬるが上を乗り越え乗り越

え、死生(しせい)知らずに戦ふ
 のりざい 糊細工〔名〕糊づけの方法
 による糊工、又その糊工したる物。盛美
 〃冬の日を力がましと糊細工
 のりざがる 乗下る〔動四自〕降りたる
 ままにて、身の位置を、後方に轉ず。盛衰記
 〃この川は、流荒くして、底深し……、水
 越さば、馬の草頭(くさく)に乗りさかれ
 のりぢぢ 法師〔名〕法(の)師(し)に同
 じ。〔古語〕鳥沙門、ノリシ
 のりぢぢ 乗敷く〔動四他〕昔の船軍に
 て、わが乗れる船を、敵の船に乗り掛け
 て、おし沈む。
 のりぢぢ 乗下〔名〕駄馬の鞍の下部。
 代玄、大津馬に、四斗入の酒樽を、乗下に
 附け
 のりぢぢ 乗靜む〔動下二他〕あばれ
 馬を、乗りこなして、靜まらしむ。狂言、止
 動方角「御馬を乗りしづめてをります」
 のりぢぢ 乗乗〔名〕のりてしゆ(乗手衆)に
 同じ。博多小女即渡「表の乗乗呼うてわた
 し。咄どもして紛らさん」
 のりぢぢ 法不知〔名〕佛法を知らざ
 ること、又その人。無法、沙石、集野の外達
 磨を破する人をこそ法知らずとはいふべ
 かりけれ
 のりぢぢ 乘尻〔名〕義馬の時の騎手。
 〔騎尻〕〔古語〕室鴉、左の乘尻は、右近の
 ぜうより始めて。著馬、五番の乘尻、左兵
 衛尉大江高遠。〃乗馬に巧みな人。のり
 たり。盛衰馬主(せふ)も、究竟(くわい)の乗尻
 なり、馬も、まことにすくやかなり。〃のり
 りかけ(乗掛)の舊稱。
 のりぢぢ 海苔汁〔名〕海苔を入れたる
 汁。芭蕉「海苔汁の手ぎは見せけり淺
 黄梅」
 のりぢぢ 糊代〔名〕ぬひしろ(縫代)を見
 よ〃紙などを糊にて縫ぎ合はする時、そ
 の紙の端の、糊を附くる部分の幅。
 のりぢぢ 乗据う〔動下二他〕乗りしづ
 めて、動かぬやうにす。太平記、遠淺に、船
 を乗りする
 のりぢぢ 乗姿〔名〕乗りたる姿。のり

ぶり。昔我馬の乗姿、手綱の取りやう
 のりぢぢ 乗過す〔動四他〕のりこす
 (乗越す)に同じ。〃適度の時間以上
 に乗る。
 のりぢぢ 乗筋〔名〕かうろ(航路)に同じ。
 のりぢぢ 乗捨つ〔動下二他〕乗物より
 下りて、その乗物を、そのまゝにして行
 く。のりぢぢ。
 のりぢぢ 乗捨〔名〕〃乗り捨つること、
 又、乗り捨てたる乗物。〃のりぢぢ(乗逃)
 に同じ。
 のりぢぢ 乗争〔名〕つけまひ(附争)に
 のりぢぢ おけ 糊播置〔名〕〃鼻は降雨
 を豫知すといふ傳説により、雨に先だち
 て、糊つけ物をなしおくべきを、人に知ら
 する意に聞きなしていへる語。鼻の鳴く
 聲。のりぢぢ。我輩(わが)鼻……明日の雨を
 知りては、糊すりおけと鳴く
 のりぢぢ 糊播〔名〕前條に同じ。ト妻千句
 〃鼻のりすれと鳴く月の夜に
 のりぢぢ 海苔煎餅〔名〕青海苔を
 炙りて揉みくづし、胡麻煎餅のごとく焼
 揚げたるもの。
 のりぢぢ 乗損〔名〕乗りそこなふ
 こと。のりぢぢ。
 のりぢぢ 乗損ふ〔動四自〕誤りて、
 乗ることの出来ぬやうになる。乗らんと
 して、爲損(なり)す。のりぢぢ。
 のりぢぢ 乗添ふ乗副ふ〔動四自〕共に
 乗りて、附添ふ。源兵「次には、この人を
 臥せて、傍に、今一人乗りそひて」
 のりぢぢ 乗初む〔動下二自〕初めて乗
 る。のりぢぢ。後、獨心から浮きたる
 舟に乗りそめて一日も浪に濡れぬ日ぞな
 き
 のりぢぢ 乗損〔名〕のりぢぢ(乗損)
 のりぢぢ 乗損す〔動四自〕のりぢぢ
 なふ(乗損ふ)に同じ。世間鳥子氣(き)「乗り損
 じましたらば、如何様にも御存分に成る
 べし」
 のりぢぢ 乗初〔名〕乗りをむること。新
 調の物に乗り、又、新年に、始めて乗るこ
 と。のりぢぢ。はつりのり。

ををみわ ろれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

6564

じはべりければ」
のりなほす 乗直「名」のりなほすこと。
のりなほす 乗直「動四他」乗り方を
改む。改めて新に乗る。
のりなほる 乗直る「動四自」馬の上に
て、落ちんとするわが身を直して、正しく
乗る。平並馬より落ちんとしければ、
、弓杖突いて乗り直らんとしけるを」
諸曲無等「馬の上にて、乗り直らん、乗り
直らんとせしかども」
のりなむ 乗憊む「動四自」乗るにつら
く感ず。乗るに困む。のりわづらふ。
のりなす 乗馴らす「動四他」乗りて、
馬を、馴れしむ。
のりならふ「動四他」乗ることを練習す。
のりならぶ 乗並ぶ「動四自」並びて乗
る。あひ乗る。源氏「誰ならん、乗り並ぶ
人、けしうはあらじはやと推測り聞ゆ」
のりなる 乗馴る「動二自」乗るに馴
る。度度乗りて馴る。のりつく。
のりなるてら 法成寺「名」ほぶじやうじ
「法成寺の直譯。「古語」夫木君をまも
るのりなる寺の横柱あらため立てて千代
もくせじ」
のりにげ 乗逃「名」乗りたる貨金を拂
はずに逃げ去ること、又その人。のりす
て。狂言「薩摩」もとは、さう云うて、乗逃
が、あまた多うおぢやうた」
のりぬき 糊抜「名」糊附「を」施した
る織物の糊氣「を」洗ひ落して、柔かに
すること。多く木綿織にいふ。ゆざし
「湯通」参照。
のりぬく 乗抜く「動四他」乗て、先
へ抜け出づ。乗物に乗りて追ひぬく。の
りこす。日飽くまでの。乗りこる。
力のかぎり乗る。
のりのおじて 法の印「句」のり「法」の
條下を見よ。
のりのき 糊樹「名」植「のり」つぎ糊
のりのつかさ 式部省「名」しきぶやう
「式部省に同じ。和名「式部省、乃利乃豆
加佐」
のりのわ 法輪「名」次條の略。夫木、い

6564

つかまためぐりあふべきのりのわのある
じの山の君し出てすば」
のりのわのてら 法輪寺「名」ほりんじ
「法輪寺の直譯。
のりは 乗場、乗場「名」乗物に乗るべき
處。二代馬「淺草川の悪所船の乗場」
のりはき 糊剗「名」建具指物「を」など
に、糊にて、板を剗「合はすること。
のりはけ 糊刷毛「名」糊を物に塗るに
用ふる刷毛。
のりはむ 乗初む「動二自」のりこむ
「乗初むに同じ。と。のりぞめ。
のりはじめ 乗初「名」乗りはじめること
のりはつす 乗外す「動四自」乗らん
として、踏みはづす。日次條に同じ。お
石集、観音を、かしくあなづらは、來迎「
びの臺「を」には乗りはづしなかんし」
のりはつる 乗外る「動二自」乗る機
會を失す。乗りそこなひて、乗組の人人
の中に加はらず。惣装「品に四の車を進
めずば乗りはづれたる人やあらまし」
のりはなす 乗放「名」乗りたる價を拂
はずに捨ておくこと。のりげなし。
のりはなす 乗放す「動四他」のりす「乗
捨つ」に同じ。太平記「馬を乗り放して、歩
立「を」になり」諸曲「羅生門」馬を乗り放
し、羅生門の石壇にあがり」
のりはなつ 乗放つ「動四他」前條に同
のりはなれ 糊離「名」糊づけにしたる
部分の離るること。芭蕉「夕風や盆提灯も
糊ばなれ」
のりはや 乗早「名」乗早きこと、又その
人。和合人「勿論の事だ、早呑込の乗早
連中、評議忽ち一決して」
のりはやむ 乗早し「形」輕率に、他人
の相談に乗る性質なり。のりげやし
のりはり 糊張「名」布帛に艶を添へ
具硬「を」ばら張るために、糊を附けて、板
に張ること、又その張られたる物。芭蕉「薄
鈍「を」の糊張などの綾」日糊を附けて、
貼りつくること、又その物。「糊貼」
のりびと 乗人「名」のりて「乗手」に同
じ。芭蕉「もろこしの船の形を造りて、乗

6564

人の袖より始めて」
のりひまち 海苔日待「名」東京灣の品
川大森邊にて、毎月三日の内、一日働か
ずに遊ぶことある日。
のりびやうし 乗拍子「名」馬に乗りて
制御する呼吸。重帷子「染手綱かいぐりか
いぐり乗拍子はいと掛けたる一聲」
のりふり 乗振「名」馬に乗る態度。のり
すがた。のりふり。國姓爺「日合殿」入部
の道、錦舎が乗振「乗心」
のりま 乗馬「名」のりま「乗馬」の略。名
義抄「騎、ノリマムノリハダカル」
のりまき 海苔巻「名」乾海苔にて巻
き包むこと、又その巻き包みたる食品。
日次條の略。
のりまきす 海苔巻餅「名」飯を、乾海
苔にて、細長く巻き包み、輪切又は筒切に
したる餅。多くは中心に干瓢などを入
る。のりまき。てづかう。
のりまさりう 則正流「名」槍術の一派。
竹内藤一郎則正を祖とするもの。
のりまさる 乗交る「動四自」他の人人
の中にまじりて乗る。榮花「女房たち、船
に乗りて遊び、左宰相中將、殿の少將の君
など、乗交りて、ありきたまふ」
のりまはす 乗廻す「動四自」次條に同
のりまはる 乗廻る「動四自」乗物にて、
方方を廻りある。百日會「祇園、鹿を見
失ひ、谷を隔てし岡の邊の小松の中を乗
りまはる」
のりまもり 法護「名」佛法を守護する
こと。續古今「から舟にのりまもりにとこ
しかひはありけるものをこの泊に」
のりめ 糊目「名」糊を附けたる痕跡。
のりめし 海苔飯「名」少し強「を」めに炊
きたる飯に、淺草海苔をよく炙りに細か
に揉み、金盞の目より洩るほどにして、
焼鹽を少し加へながら交ぜたるもの。
のりもち 海苔餅「名」青海苔を水に浸
し、搾りて水氣を去り、細かに刻みたるを
入れたる餅。
のりもの 乗物「名」馬・牛・車・輿など、
すべて人の乗りて交通上の助となるも

6564

の。日ながほるか「長棒駕籠」に同じ。「駕」
若風、新しき乗物、……外門「を」へ昇き
据ゑて、脚氣馬少し手前取直したらば、
駕籠「を」に乗せる時期も、又有るものぞ」
のりもの 賭物「名」かかもの「賭物」に同
じ。「古語」空盤うへ、基盤召して、仲忠
と遊ばす。何をのり物にはせん、いとせ
ちならん物もかけじ」
のりものえ 乗物柄駕籠「名」次條を見
駕柄の輿「を」句「ながえざり「長柄切」
に同じ。海人「駕柄輿、是者田舎等
用之」
のりものかき 乗物昇駕昇「名」乗物
を昇くこと、又その人。かごかき。源氏
「これぞ、汗かき、乗物昇」
のりものかご 乗物駕籠「名」のりもの「乗
物」に同じ。
のりものさうり 乗物草履「名」もと、乗
物「の」上下に用ひしよりの名なるべし」
表も裏も蘭「の」のからを織りて造りたる
草履。「江戸の語」
のりものせった 乗物雪駄「名」もと、乗
物「の」上下に用ひしよりの名なるべし」
表に緞子「を」裏に革を附けたる雪駄。寛
文の頃、奥向の貴婦人に用ひられ、享保以
後は、民間にても行はれたる。
のりものつく 賭物盡「名」かけつ「賭盡」
に同じ。「古語」盡盤はやう、のりものづ
くの事はと仰せらる」
のりものふとん 乗物蒲團「名」乗物
に敷く蒲團。「一代女御所被褥」に、乗物
蒲團まで揃へて」
のりものまど 乗物窓、駕窓「名」乗物
の左右兩側に附けたる窓。若風、金宇津の
山の切通「を」袖指岩「の」の陰に隠れ、
乗物窓を覗きて」
のりや 糊屋「名」糊を作り、又、賣る家、又
その人。二代馬「糊屋の娘」

ををるわ るれるりら よゆや もめんむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

のれん

のれん 暖簾名「名」暖簾に掲げる
す商家の屋號。
のれんはた 暖簾旗「名」指物「名」の
一。布帛三幅を、暖簾幕の如きさまに附
けたるもの。

のれんまく 暖簾幕「名」縦幅「名」にし
て、下の方を縫外「名」にせる幕。孕常盤
「暖簾幕にて、めぐりを圍ひ、細を許して、
木の根の床」

のれん 鈍「名」鈍し「名」の語幹「名」人の
性質ののろきこと、又その性質の人。の
ろま。のろさく。

のろ 鹿「名」鹿の類。朝鮮に産し、形
小さくして、毛色美し。のろしか。
のろ「名」石灰を水に溶かしたるもの。土
塗に用ふ。

のろ 野「名」野は接尾語「名」の（野ら）
に同じ。「古語」。「おほのろ」

のろ あし 鈍足「名」歩みののろき足。（早
足に對して）和合人「どうして、お前の様
な遅足の」が御同道「名」に歩かれるも
のか」

のろ かいせき 野呂介石「名」人「名」畫家。
名は隆年、字は松齡、矮梅、混齊、十友、寓主。
碧道人等の別號あり。紀伊國和歌山の人。
池大雅に學び、清人伊孚九の畫風を喜び、
山水を善くす。藩侯に徵されて、その繪所
となる。文政十一年歿す。年八十二。さ
んせき（三石）參照。

のろ 鈍臭「名」のろきさま。の
ろろ。「何をのろきとしてゐるのだ」
のろくさじ 鈍臭し「形」のろじ（鈍し）
を罵りていふ語。

のろけ 惚氣「名」のろけること、又その
話。のろけばなし。和合人「先へ二人の」
並んで、何か、のろけを受けつ外「しつ
行（く）奴」があるのよ」

のろけばなし 惚氣話「名」のろけに關
する話。のろける話。のろけ。

のろけんちやう 野呂元丈「名」人「名」醫
者。名は實夫。連山と號す。伊勢國の人。
傍ら儒學に通じ、最も本草の學に精し。幕
命により、諸國を遊歴して、藥草を採集

のろ

し、その功勞を以て、醫官となる。寶曆十
年歿す。

のろける 惚氣する「動下一自」情人に關
する自己の満足語る。戀人の物語をな
して得意がる。のろけ話をなす。燈籠花
舞臺「のろけさあ、惚れたが理（ま）
まい」

のろ 色情に溺る。のろくあり。八笑
人「横町の文字焼（やき）といふ豐後の師匠
にひどくのろけて、おれに取持つてくれ
ろといふ譯だらう」

のろさく 鈍作「名」のろき人を、人名に
擬していふ語。魯鈍なる人。のろすけ。

のろ 狼烟 狼煙「名」戰國時代に、軍
中の相圖に、薪を燒き、又は筒に火藥を
込めて、空高く火を爆發せしめしもの。
とぶひ。「烽火」

のろ 鈍し「形」速かならず。おろ
れがちなり。ぐづぐづしてあり。おろし
にぶし。ぬるし。とろし。遅鈍なり。愚
鈍なり。とろし。色慾に溺れやすし。
のろけがちなり。あまし。とろし。世世
「なぜ、あの女にのろくなつたらう」

のろ じか 羅「名」動「名」の（羅）に同じ。
のろじもり 狼烟守 狼煙守「名」狼烟を
守る人。烽火。

のろすけ 鈍助「名」のろさく（鈍作）に同
のろつく「動四自」のろるのとす。ぐづ
つく。のろつく。驢毛「駝落して走るあ
れば、雲非路の道草食ふ遊山旅（やま）の
ろつくあり」

のろ 鈍鈍「名」のろきさま。のろ
のろ。鈍鈍「名」のろきさま。のろ
のろ。ぐづぐづ。のろりのろり。

のろ 形「名」怨めしげなり。のろひ
がまし。いまはし。いまいまし。一説に
は、甚だもろく、おろかめきたる意ともい
ふ。「古語」

のろ 平昔「前代未聞の不思議かなとて、の
ろのろしげに、憚る所なく口説き」

のろ

のろひ 詛呪「名」のろふこと。呪詛（じゆ）
のろひ あはす 詛合はす。呪合はす（動
四他）同時にのろふ。のろひごとする人
をのろふ。字彙「物忌してゐたるは、慎む
べき日にこそあらめ。その日のろひあは
せばぞ、しるしあるべき」

のろひ 詛言呪言「名」のろふ言葉。
のろひ。字彙「のろひごとせし人」十訓女
房車をやりて過ぎける牛飼衆部の、のろ
ひごとをしけるを聞きて」

のろひ 詛事呪事「名」のろふしわ
ざ。のろひ。和合人「詛事には、丑の時ま
ゐるをするは」

のろ 詛ふ呪ふ「動四他」怨めし、憎
しと思ふ者の、禍に罹らんことを、神佛に
祈るとこふ。呪詛（じゆ）す。憎く思ふ
者の仕事の、失敗に終らんことを望む。
詛ふ事も、口から詛ふ「句」口は禍の
門なれば、慎むべし。「諺語」

詛ふ、死なす「句」詛はるる者は、却り
て容易に死ぬる事無し。「憎まれ子、世
にはばかる」の類。「諺語」

のろ 野呂間 野呂間能呂間 野呂松
「名」間の鈍（き）義と、のろま人形に
本づくともいふ。まねけ（間拔）參照。氣
の利かぬこと、又その人。とんま。まね
け。あはう。愚鈍。「鈍間」人罵り
ていふ語。とんま。まねけ。「鈍間」
「のろまにんぎやう（野呂間人形）の略。六玉川
人形の中でのろまは毒らしき」

鈍間（のろま）「句」愚鈍なる子弟。
鈍間の一寸、馬鹿の三寸「句」下種
のろ 一寸、鈍間の三寸に同じ。「諺語」

のろ まつかひ 野呂間 野呂間能呂間 野呂松
「名」野呂間人形をつか
ふ人。人形つかひ。六玉川のろまつかひ
も燦爛て喚ぶ」

のろ まつかひ 野呂松 勘兵衛「名」
「人傀儡師。江戸の和泉太夫の一座に加
はり、自ら操人形を工夫し、野呂松人形と
稱す。野呂松一に野呂松と書く」

のろ まにんぎやう 野呂間人形 野呂間
人形 能呂間人形 野呂松人形「名」風
戸時代に行はれし、一種の操人形。頭
局、顔青黒く、賤しげなる形にして、滑
稽なる狂言を演ぜしもの。野呂松勘兵衛
の創めしものといふ。のろま。そろま人
形。そろま。八笑人「たとへば、江戸節の會
へ、雇はれし能呂間人形、それさへ青は遣
はねば」

のろ

のろ まやう 鈍間 野呂「名」のろまなる
人を罵りていふ語。とんま。はんまやう。
のろ 鈍（動四自）急に激り、急に引きたる
川水、湛ひて動かず。

のろ 呪「名」古、西域より支那を
經て傳來したる幻術を行ひし人。新猿樂記
「猿樂……就中呪師（じゆ）」

のろ 呪「名」のろきさま。のろつくさま。
のろり「名」のろきさま。のろつくさま。
のろり 呪「名」前條の語を重ねてい
へる語。のろり。浮世風呂「湯波の男、湯
を、のろりのろりと汲んでゐる」

のろ 野分「名」次條を見よ。次條の
略。「古語」源氏八月、野わき荒かりし年」
野分の風「句」野の草を分きて吹く
風の義。秋冬の際に吹く荒き風。のわ
き。のわけ。和名「暴風、波夜知。又能
和岐乃加世」

野分の露「句」野分の吹く時の露。讀
千鶴村野分の露の玉すだれ袖に吹
きまく秋の夕風」

のわき 野分「名」野分の吹く時の露。讀
千鶴村野分の露の玉すだれ袖に吹
きまく秋の夕風」

のわき 野分「名」野分の吹く時の露。讀
千鶴村野分の露の玉すだれ袖に吹
きまく秋の夕風」

のわき 野分「名」野分の吹く時の露。讀
千鶴村野分の露の玉すだれ袖に吹
きまく秋の夕風」

のわき 野分「名」野分の吹く時の露。讀
千鶴村野分の露の玉すだれ袖に吹
きまく秋の夕風」

のわき 野分「名」野分の吹く時の露。讀
千鶴村野分の露の玉すだれ袖に吹
きまく秋の夕風」

のわき 野分「名」野分の吹く時の露。讀
千鶴村野分の露の玉すだれ袖に吹
きまく秋の夕風」